

# 第三回「文芸思潮」エッセイ賞発表

二〇〇七年度第三回「文芸思潮」エッセイ賞に多数の御応募をいただきました。まことにありがとうございます。おかげさまで今年は昨年度二一二篇の倍以上の四三三篇の作品が寄せられ、スタッフもうれしい悲鳴をあげました。全国および外国から、また年齢層も下は一三歳から上は八七歳まですべての年代層にわたり、その内容も多彩で、力作、秀作も多く、たいへん充実した選考となりました。心から御礼申し上げます。

応募作の中から、まず選考委員会予選担当による第一次予選、第二次予選が行なわれ、さらに第三次選考を通過した作品が、三神弘、福岡哲司、水木亮、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

本年度は、レベルもさらにながったこと、また応募者倍増を考慮して、奨励賞に準ずるものとして入選を設けました。また例年どうしても影が薄くなりがちで、社会批評に関するエッセイも、今後は積極的にとりあげていく方針で、新たに社会批評賞を設けることになりました。

今号には当選作および優秀賞を発表させていただきますが、奨励賞、社会批評賞および入選作なども、できるだけ「文芸思潮」または「文芸思潮」ウェブに掲載させていただきます。御期待下さい。

第四回「文芸思潮」エッセイ賞は明年も今年と同じ要領で募集する予定です。どうぞ奮って御応募ください。

## 「文芸思潮」エッセイ賞

当選 「リンデンの葉、散り逝きて」

松尾文雄 (東京都東久留米市)

当選 「ばあばの生きた証」

堤かおり (福岡県福岡市)

## 奨励賞

「セイのこと」 平野ゆき子 (東京都西東京市)

「妻の愛を受けて」 鳩 平和 (兵庫県姫路市)

「鷹の蹴落とし」 安田ひとし (奈良県奈良市)

「ひまわりたちの運命」 ノイハウス聖子 (英国・サレーイ市)

「父の選択」 さくらまい (米国・ニューヨーク市)

「国際工業規格ISOに関わった日々」

小佐美智子 (兵庫県神戸市)

「老け役」は止めよう 南天 間 (大分県大分市)

「花水木」 小林理樹 (東京都小金井市)

「ある帰郷」 高橋惟文 (山形県山形市)

「故郷は異国なり」 長谷川智美 (京都府丹後市)

「終の棲家」 前岡光明 (東京都町田市)

「心のともしび、音楽」 あきもとのりこ (兵庫県淡路市)

「からだの耳」 栃内まゆみ (神奈川県藤沢市)

「オカリナは靴を履いて」 永谷真衣 (岐阜県岐阜市)

「うしろめたい食べ物」 三村真智子 (兵庫県芦屋市)

## エッセイ賞発表

### 社会批評賞

「プライバシーの空間考」

南條憲二 (埼玉県所沢市)

### 優秀賞

「花冷えの朝」

上村和子 (兵庫県神戸市)

「海に咲く華」

印南房吉 (神奈川県横浜市)

「少女の視線」

桐ヶ谷忍 (千葉県千葉市)

「ペテロ島の蛇」

岩本マリ (東京都世田谷区)

「朝の電車で」

栗谷京右子 (東京都杉並区)

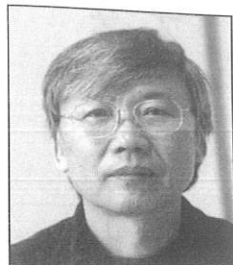
「ソメイヨシノの奇跡」

高橋由美子 (宮城県岩沼市)

南野睦子 (大阪府八尾市)

「音」

# 選評



みかみ ひろし

1945年 山梨県甲府市  
生まれ  
法政大学中退  
1982 「三日芝居」で  
すばる文学賞受賞  
著書 「三日芝居」  
「花供養」  
「月と五人の男」

## 書くべき対象と視点

### 三神 弘

当選作の松尾文雄「リンデンの葉、散り逝きて」は、ドイツが舞台で、日本人の「私」がドイツ人夫婦と列車で偶然乗り合わせたことから、ベルリンの壁がもたらした夫婦と愛犬の別離、再会をたどる。

夫婦と愛犬は東ドイツで生活していたが、秘密警察に容疑をかけられ、逮捕目前に「脱出」を執行する。この「脱出」の「犠牲」になったのが愛犬で、警備兵に「猛然と」襲いかかり、夫婦を逃がす。ベルリンの壁は翌年崩壊し、夫婦は愛犬を探し出すが、愛犬は「自殺をする」ように「ほとんど餌は受けつけ」ず「衰弱」していたという。

こうして愛犬は夫婦の元に帰るが、半年後、「夫人のひざの上で、安らかに瞑目した」という。語り手の日本人の「私」は、夫婦に案内されて、愛犬の墓地も訪ねている。そして、「短い生涯だったが、最後の半年は」至福の時間だったに違いない」と結んでいる。

この作品は、いわば狂気の醒めた後の静けさ、といつてよい。感慨に満ちた静けさであり、それゆえに、事件が終わっても、いつまでも書くべき対象となり得ている。作者の眼差しは、夫婦にも、愛犬にも、同様に注がれ、このことは文体にも示され、したがって、愛犬物語とも、戦いへの批判とも、良心への着目や信頼とも、安らぎへの憧憬とも、多様に読めるようになっていく。

当選作の堤かおり「ばあばの生きた証」は、「戦争を知らない世代」の「私」が、「戦争を体験した人の声を、体験した人の言葉」で「受け継ぎ」、「字に変えて」いきたいと目覚めていく、いわば、宣言である。「大好きな「ばあば」が肉親の「戦死の通知」に「畑の真ん中に立ち、大声で叫んだ」こと、「満州」へ「遺骨を引き取りに」行ったことなどを聞き、「家族の物語」の「大切」さを痛感していく。

家族のなかで、親から子へと伝えられてきた「戦争の話」だけに、家族の会話に似て、他人にはわかり難いところもあるが、その分、語り口によって、聞く耳も澄ん

### 入選

- 「わたしの好きな縄文人骨」 佐方希与子
- 「銭湯に恋して」 西田茂夫
- 「秋を待つ」 カオリナイト
- 「母の人生、そして天国へ召された日」 杉野未樹也
- 「被告を懲役一六年に処する」 野口隆司
- 「仕事に染みついた」 田島忠一郎
- 「牛乳瓶の音」 近藤 健
- 「古菓へ…」 守屋正雄
- 「百八十円の想い出」 藤田陽子
- 「一瞬、言葉になりませんでした」 野中の子
- 「父の死後知った父のこと ふたつ」 藤木弓子
- 「記憶の底に」 山口順子
- 「じいっと手を見る」 北浦がん
- 「職人」 岡部憲和
- 「過去への夢」 岡部達美
- 「光合成のしかた」 いくら凜子
- 「巾着耳の話」 伊瀬知三郎
- 「きみたちは、強い」 田村怜奈
- 「裏切りの女たち」 ヨーコ・クラーク
- 「母の親友」 渡辺裕香子
- 「読書のひねくれた意義」 佐藤 渚
- 「政治家よ驕るなかれ―元日本兵の怒り―」 高松真弓
- 「昼風呂の話」 境 久
- 「あしたのあたしはどこへいく」 海童 仁
- 「ReReRe」 日高 伶

でいく。「ばあば」も、「私」に何度も呼びかけられるたびに、表情を得て、人格も生じていく。また、何処の家族にもいる「ばあば」を彷彿とさせ、さらに「戦争」と、それぞれの「家族の物語」に目を向けさせもする。

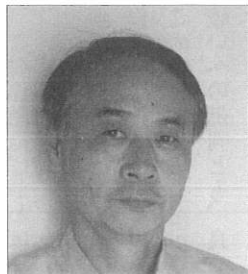
優秀賞には、七作品が選ばれた。岩本マリ「ペテロ島の蛇」は、少女時代の回想で、ある日「さくらんぼのように」いつも一緒に「悪友」と蛇を捕らえ、川の中に小さな「秘密」の島を作り、蛇を「宝物」とする。蛇はやがて島を出て、川へと泳ぎ出していくのだが、蛇の「滞在」の短さを、「悪友」との「輝きの寿命」と捉えるところに惹かれる。結末の解釈は不要で、蛇の未知なる行方は、作者に戻るのではなく、読者に向かつて行くべきだ。

上村和子「花冷えの朝」は、戦争で解体した家族の、歲月を経ての再会、二人の母をもつことになった「私」の心境をとおして、「和解」の複雑さを描く。「私は二人の母のどちらも捨てた。母としてではなく、身内のか弱き年寄りとして、愛情ではなく思いやりを込めて接して行こうと決めたのだ」という箇所は、「私」が取らざるを得ないところの均衡がある。

南野陸子「音」は、病と向き合うことで「自分を再生していく」筋立てで、明るい展望がある。今後、さらに「音」を言葉に昇格させ、作品にしていきたい。栗谷京右子「朝の電車」は、人のために祈ること、祈りは人に伝わ

ること、また、信じるとは抽象的なことではなく、体験に基づくことをさとしてしている。

高橋由美子「ソメイヨシノの奇跡」は、「プライドが高く」その反面「涙もろい」「おばあちゃん」を介護する「私」が、その人生体験にこころ打たれ、また、「生命力」に学ぶという内容で、高齢者と暮らす態度に、示唆がある。印南房吉「海に咲く華」は、「精一杯、生きて来たんだ」という述懐に、事故、闘病、社会復帰の日々が重なり、切実だ。桐ヶ谷忍「少女の視線」は、「私の中にあるはずの良心が、体内から出て行ってしまった」という「人格障害」の状況を描くことで、生きる意志に転化していく。



いがらし つとむ

1949年 山梨県生まれ 像受読群  
79 「流論の島」で賞賞賞  
新人長編小説賞  
98 「緑の手紙」で賞賞賞  
新聞・NTTブリイ回イ新  
テック主催第1文芸新  
ンターネッ秀賞賞賞  
人賞最優秀賞賞賞  
2002 「鉄の光」で健友館文  
学賞受賞

## 母の言葉の力

### 五十嵐 勉

第三回の今年は、昨年倍以上の作品が寄せられた。底

通知を受けた時、ばあばは静かに聞いたのち、誰もいなくなる一人、畑の真ん中に立ち、大声で叫んだ。どこから発するでもない腹の奥底からあげられる、言葉にならない叫びを、祖母は畑のあぜ道で偶然聞き、驚いて顔を上げた——ここには肉体の奥底まで届いてくる声が普遍的な強さを持つてこだましている。そしてこれは、作者が女性という、肉体によって血をつなげる者であるがゆえに受け止められた声でもある。ここにこの作品の強さがある。同時に、四つの世代をつなぐ愛情を基盤にして、未来へそれを繋ぎ受け継いでいこうとする姿勢に、他者を震わせるような潔い方向が感じられる。未来を託し得る姿勢がある。「私」が祖母の『字』になるよ」という言葉は、強烈であり、この肉声は信頼に値する。堤氏には、さらに戦争への眼を外す部にも向けて、その本質に迫ってほしい。

二作品は傑出していたので、当選はすんなり決まった。優秀賞の印南房吉氏は連続三回の受賞で、その継続力には敬意を表す。テーマは苦闘の人生を描いて一貫している。今回の「海に咲く華」は左脚を切断したりハビリ病院を舞台にしているが、突如襲ってきた大きな災厄に、ある者は抗しきれず、生きる意志を持ちつつ死んでいく。励まし合い、生き抜こうとするその意志が、残った者に受け継がれる。その生死の絆が、人間という種のある深い構造を見せてくれる。自分の生は多くの他者の死によって支えら

辺が大きく広がり、レベルもアップした。読み応えのある作品も多かった。うれしきかぎりである。また十代の応募も増え、今回は中学生・高校生の入選も三編あった。若年層の広がりも喜ばしいことである。

当選作、松尾文雄氏の「リンデンの葉、散り逝きて」は、東西ドイツの分裂時代から統一へかけての歴史の激動を背景に、一つの家族の脱出ドラマを犬の愛情を主軸に描いた力作である。歴史の舞台が劇的なだけに、忠犬ハチ公の物語以上に、鮮やかな一匹の犬の姿が浮かびあがってくる。映画を観るような優れた一篇である。

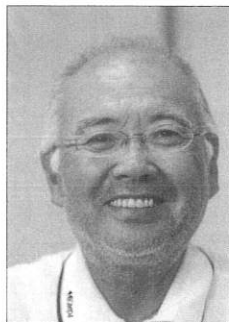
同じく当選作、堤かおり氏の「ばあばの生きた証」は、そうした映像性はほとんどなく、逆に言葉の強い力によって、直接心に訴えてくる、深い共感性を備えた作品である。「天を貫く」言葉がここには確かにある。

日中戦争・太平洋戦争を通じて、子を戦争で失う母親の心の傷みを描いた作品は意外に少ない。「岸壁の母」などの歌謡曲としては噴出しているものの、文学としてはあまりお目にかからない。本来、自分で生んだその命を他者に取られ、理不尽な死に追いやられるその心と肉の張り裂ける痛切な嘆きは、もっと書かれていいはずなのに、あまりにありふれているせいか、出てこない。男たちのいい加減な反省に消されている。筆者は、その声をしっかりと受け止め、四世代を超えて、現代に呼び起こしている。「戦死の

れていることを教えてくれる点で、陰影を濃くしている。

今回は優秀賞も含めて、傷つけられた精神とその癒しを描くものが多かった。また「いじめ」や「ホームレス」についても、「きみたちは、強い」（田村怜奈）、「ある帰郷」（高橋惟文）など鋭く抉っている作品がいくつも見られた。逆に動物についての愛情を描いたものも先回と同じく多く、幅広く鷲や孔雀にも及んで心を潤された。これらはよく見れば「いじめ」の裏返し現象であり、その分いっそう傷つけられるものと、それをいやすものとの互いを際立たせ合っている。現代を象徴していると同時に、その解決の方向をも暗示しているところに、大きな収穫を感じた。また仕事や労働に関する作品も充実したものが多く、頼もしさを覚えた。「国際工業規格ISOに関わった日々」（小佐美智子）、「仕事に染みついた」（田島忠一郎）、「牛乳瓶の音」（近藤健）、「職人」（岡部憲和）、選には漏れたが「星座に近く」（天辰芳徳）、「工務店の心意気」（西尾久）など、いい味が出ている。

多彩、百花繚乱で、入選と落選の差はほとんどない。紙一重であり、たくさんの人に読んでほしい作品ばかりである。入選とは別に、自身のその文章の絶対的価値を大事にし、未永く自分の傍らに置いてやってほしい。



みずき りょう

1942年 北朝鮮生まれ  
99小説「祝祭」で  
第16回織田作之助  
賞受賞  
2006小説「お見合いツアー」で第49回農  
民文学賞受賞  
07小説「海老フライ」  
で第19回労働者文  
学賞受賞

## 印象的なエッセイは映像的

水木 亮

応募数が増えた分、確実に質が昨年より高くなっていると感じた。最優秀の一本は一通り読んだとき決まった。第一回の最優秀「ヌヌ」のように、ストリートに私のところをとらえるものがあつた。

以下印象に残った作品について述べたい。佐方希与子さんの「わたしの好きな縄文人骨」は、博物館でガイドをしている「わたし」は、三五〇〇年前二匹の犬と共に埋葬された縄文人骨に関心を持っている。入館者にいろいろ質問されるがそのたびにはっとすることがある。一緒に犬が埋葬されていたことも、どういう理由なのか遙か昔を想像して考える他ない。長い歳月土に埋もれていたそれは、時代を超えて人間が何かの力で生かされているような不思議を感じるという。ロマンの香りのするエッセイだった。

南天間さんの「老け役」は止めよう」は実際は老けていないのに、「老人役」を演じる人が多いことを啓発する。六五歳を過ぎると老人は老人らしくを目指して、その型に自分をはめていくのは愚かであると考え。老人の意識改革をねらう、前向きな発想に好感をもった。

栗谷京右子さんの「朝の電車で」は朝の電車で乗り合わせた、知的障害がある青年とその母親を描く。「私」は自分も過去に知的障害になりそうな時があり通院した経験がある。そこで、電車の中でうめくような奇妙な声を発する青年とその母親が、それなりに人生で幸せを掴むことが出来るように心で祈った。目を開けると、母親が自分を見つめていて、電車を降りるときその母親は私に向かって深々とお辞儀をした。自分の思いが伝わったのである。人の思いは空気をただよう「気」のようなものではないかという。人間の存在が信じるに足るものであると言ふことを、日常生活の一端から切り取って見せたいエッセイだと思つた。

長谷川智美さんの「故郷は異国なり」は二十二年ぶりに故郷に帰り、そこから新しく仕事を自分で自立しようとする女性の生きざまが描かれる。役場に行くとき職員が一斉にこちらを見るなど、ひとつひとつのエピソードが胸を打つ。エールを送りたい。

海童仁さんの「あしたのあたしはどこへいく」は若者の

三村真智子さんの「うしろめたい、食べ物」は、素朴な食べ物のおいしさを淡々と書いていて読んで楽しいエッセイである。作者が人には理解されない、言えない、けれど自分でどうしても作ってしまううしろめたい食べ物。「甘酢スルメごはん」「おからちゃんはん」「端っこのカリカリ」などは、どれもこちらがうんうんとうなづいてしまいうさうである。そこには「舌の原風景がある」というのも気負わずおしゃれでよかった。

境久さんの「昼風呂の話」は八六歳になられる方だが、昭和初期の北九州の銭湯の情景が方言を含めてほのぼの伝わるエッセイだ。そこにやってくる映画の活動弁士、酌婦、これらの昼間銭湯にやってくる人たちのあけすけな会話も楽しい。しかし、彼女らは身売りされた過去をもつ女性達でもある。ほろにが味の味も漂う。

藤田陽子さんの「百八十円の想い出」は、東京に住む「私」が、乗り合わせたバスでたまたま百八十円持ち合わせがなかった女性にお金を差し出した。そこで昔を思い出す。母を亡くし祖母に預けられて育った私が、一八歳の時父親に会うために初めて旅をするがその途中で財布を盗まれる。バスに乗るには百八十円がいる。弱りはてっていると、見知らぬ男が事情をきいてくれ、「ねえちゃん、もう泣くな」とキップを買ってくれたことを懐かしく思い出す。その情景が浮かんでくる話である。

働くことへの思いを書く。格差社会の若者の有り様を描いていて興味深い。また選には漏れたが大星那生さんの「公園A」も、淡々と公園の情景を描くがその視線に惹かれる。作者の心情を重ねるとさらによかったらう。

最優秀賞の松尾文雄さんの「リンデンの葉、散り逝きて」は映画のような展開で、東西ドイツの壁が崩壊する当時の様子を描く。エッセイはまた事実の重さでもあり、どうしても書いておきたい一篇は誰にでもあるはずだ。

目を閉じれば情景が浮かんでくる。印象的なエッセイは映像的だと思う。今回これらの作品を得たことはとても嬉しい。



祝祭

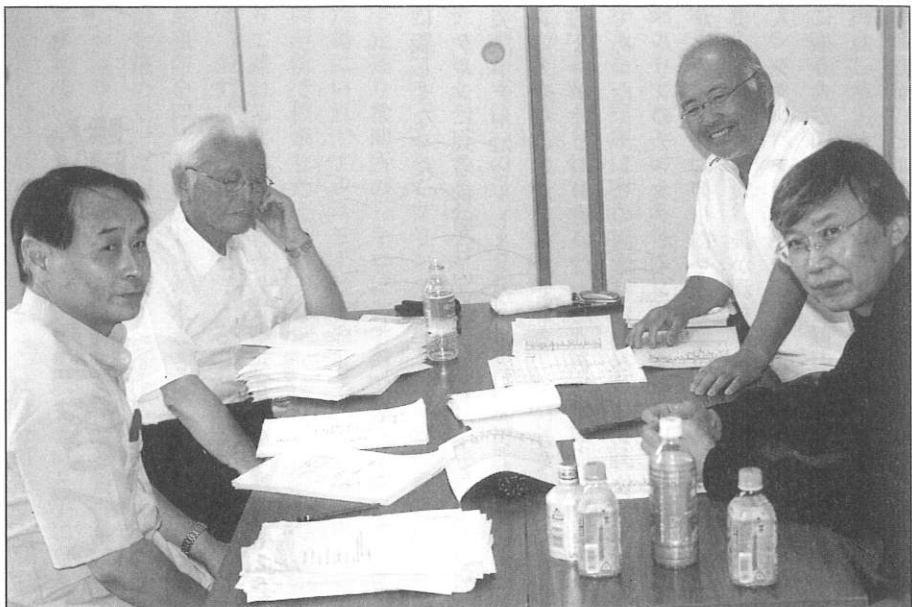
水木 亮

織田作之助賞「祝祭」  
農民文学賞「お見合いツアー」

水木亮の諸作はいずれも農民文学の系譜で、大地から空の雲行きを仰ぐごとくに、時代の問題を取り上げ、動かぬものど、動くものを対峙させ、今日を生きるエネルギーに満ちている。作家・三神 弘

こういう意志の持続が意味を持つのだと思う。

その他、入賞・選外問わず、個人的に魅力を感じた作品を挙げてみたい。「ペテロ島の蛇」(岩本マリ)は女の子版トムソーヤ。数を書いていく方がいい。「鷹の蹴落とし」(安田ひとし)は誰にでもある思いこみの罪悪感を綴る前半がいい。「読書のひねくれた意義」(佐藤渚)の高校生という年代に抱きがちな読書功利主義・万能主義への懐疑は案外正鵠を射ているかも知れない。「ReReRe」(日高倫)は孫と祖父との交情が携帯電話という現代的なツールを通して胸を打つ。「秋を待つ」(カオリナイト)は番の白鷺の訪れを心待ちにしている視線を感じる。「昼風呂の話」(境久)は田舎町の活動小屋、銭湯、芸者衆、私娼家の酌婦等々ノスタルジーを喚起する材料に事欠かない。「職人」(岡部憲和)の若々しい耳と目が魅力である。「きみたちは強い」(田村怜奈)はいじめの対象の子どもたちへの応援歌。「貧乏アラモード」(山下一味)はこういう作品が何十とあれば一つの世界を作るだろうと思われる。「公園A」(大星那生)のひたすら公園に向け続けている眼と耳を穏やかとするか不穏とするか。「政治家よ驕るなかれ」(高松真弓)は八十三歳の高齢者からの戦場体験の聞きの内容が凄惨である。



「文芸思潮」エッセイ賞選考会風景



ふくおか てつし

1948年生まれ  
樋口一葉研究会員  
著書「評伝深沢七郎 ラブソディ」(TBSブリタニカ第3回開高健賞奨励賞)「遠い散歩近い旅・山梨文学散歩」(山梨ふるさと文庫)ほか  
URL:<http://fkoktts.hp.infoseek.co.jp>

## 「事実」と「私」

### 福岡哲司

百円玉や五百円玉のは天下の通用金だ。いくら積まれても「ため込んだな」とは思うが感心しはしない。百円は百円、五百円は五百円、その塊は塊というだけのことである。金は誰かのものだが、誰のものでもない。

ことばも百円玉や五百円玉のように誰でも公平に使える。けれどもその堆積も「書きも書いたり」というだけではさほど感銘はない。出来事の報告もなるほどと思うばかりだ。そこに、いまだかつてなかった、ここにしかないもの、この人だけのものを感じ取れてこそ、読後心地よいのだろう。

エッセイは「私」の「事実」から始まる。「事実」とは予め外界に在る出来事のようなのだが、実は視覚、聴覚、触覚

……といった感覚として認識されるに過ぎず、「私」はその集合だ。さらにこれを手垢が付き光沢を失った、誰でも使えることばによって捉えねばならない。そうして、するりするりと逃げようとする「事実」と「私」の首根っこを押さえようとするのが表現の過程だ。ときには捉えようとした「事実」と「私」とが恐ろしい形相でこちらに刃向かってくることさえあるはずだ。この格闘を避けようとする飾りやポーズばかりの多い単なることばの堆積になる。「事実」「私」は予め厳然としてあるらしく、作品が胚胎した時のままに終末まで一貫しているのはルポルタージュを読まされたり、のぞき見したりのスリルはあるが、読後爽やかではない。

応募数が増え、年齢層も幅広くなった今年のエッセイ賞だが、どきりとさせられる作品は少なかった。これは一方では素材に寄りかかるとはなく、落ち着いて事象を見つめようとする作品が多かったということでもある。これはこれで魅力ある作品がちらほらあったのだが、見つめる「眼」は見開いていても「事実」や「私」との葛藤がなく、そのまま口を閉ざすしかない作もあった。

「リンデンの葉、散り逝きて」(松尾文雄)は素材が痛切であり、うまさには感心したが、「私」と表現との距離感が物足りない。「ばあばの生きた証」(堤かおり)の戦争を女性の立場から語り継ごうとする意志に好感が持てた。

## リンデンの葉、散り逝きて

Essay

松尾文雄

人との出会いとはまことに不可思議なものだ。運命的でさえある。あの日、あの時、あの国で、あの列車で、あの車両に乗り合わせなければ、未来永劫ドイツ人のヒルト夫妻との出会いはなかっただろう。その変数が一つでも狂えば出会いの機会はなかった。それだけではない。あのとき、あの歴史的な事件に遭わなければ、以後十八年近くもの付き合いは多分なかっただろう。

私達夫婦がヒルト夫妻と知り合ったのはフランクフルトからケルンに向かう列車、ルフトハンザ・エクスプレスの中だった。1989年11月9日のことである。発車して暫くの間は、互いにライン沿いの景観に酔いしれていて会話はなかった。だが、コブレンツを過ぎた頃、話が弾みケルンに着くまでの一時間半ほどで、まるで百年の知己のよう

に親しくなった。

ケルンに到着後、翌日の再会を約して別れたが、その夜、突然ホテルにヒルトさんから電話があった。「いまベルリンで大変なことが起こっている。家にきて一緒にテレビを見ないか」とのお誘いだった。それはベルリンの壁の崩壊であった。テレビの画像には東ベルリンの検問所を越え西ベルリンのチェックポイント・チャアリーへ数万人の群衆が津波のように押し寄せるさまが映し出されていた。感極まって涙を流す人、誰かれなく互いに抱擁し肩を叩きあう人、シャンパンで乾杯する人、壁にハンマーを狂ったように振う人、群衆はそれぞれに自由への解放感を爆発させていた。私達もそんな沸騰した熱気の中にもう数時間も浸っていたが、ヒルト夫妻には、なにかそんな群衆とはすこし

馴染めない雰囲気があった。やがて、ヒルト夫人が押し殺したような嗚咽を漏らし始め「もう一年早ければ……私達は子供を見殺しにしたのよ……」そのうめきのような叫びは、やがて絶叫にちかい慟哭となった。そんな夫人を労わるようにご主人は背中を優しく撫で、なだめる様子に他人が触れてはならない秘密があると感じた。

しばらく経ってご主人が「驚かれたでしょう。実は私はち東ドイツからの脱出者なのです」と語りはじめた。ご夫妻は共に1960年東ドイツのチューリンゲン州の首都エルフルトで生まれた。幼な馴染であった二人は1987年春に結婚した。二人とも大の犬好きだったので、記念に犬を飼うことにした。それがジャーマンセパードのアシュラーだった。生後三ヶ月の雄で小さいながらも俊敏な目つき、逞しい脚は頼もしい将来を明示していた。特に夫人によくなつき、外出も散歩も職場でもいつも一緒に人気ものだった。食事でさえも、夫人とシェアするほどだった。家族同然どころか家族そのものだった。ご主人の仕事は自動車の特種部品で、その新しい技術の習得のため、西ドイツの欧州最大の自動車部品メーカーB社(ケルン)まで度々出張していた。B社は現地手当てを西ドイツマルクで支給してくれ、そのままB社にデポジットされていた。これが東ドイツのシュタージュ(秘密警察)に知れ、外貨不正取得の容疑で逮捕は目前と考えられた。逮捕されれば生命の

保証はない。ヒルトさんはやむなく東ドイツからの脱出を決意した。ヒルトさん自身は仕事柄「特別通行証」を持っているから検問所はいつでも通過できる。問題は奥さんとアシュラーである。そこで奥さんには後部座席を改造し隠れるスペースを造ることにした。しかし、成犬のアシュラーも入れる余裕はない。考えた挙句、西ドイツの友人にプレゼントするという名目にした。そして、一番気をつけねばならない問題は密告である。親兄弟、親戚、友人にも悟られず出発せねばならない。六人に一人はシュタージュか密告人といわれた監視国家東ドイツなのだ。

やがて決行の日、1988年の10月15日があった。ライブチツヒから、アイゼナハを経て検問所を通過し、西ドイツのベブラ、そしてフランクフルトまでの行程を計画した。予定通り検問所の一キロほど手前で奥さんを後部座席の隠れ場に隠れ、アシュラーはその上に座らせた。そして、検問所前で停車したところ、警備兵は今日に限って車から降りて離れるよう命じてきた。多分、誰かが密告したのだろう。まず、なぜ犬を乗せているのかを尋ねられ、更に、後部座席を開けると命じられたときは、もはやこれまでと覚悟を決めた。だが、警備兵が後部座席に入ったその瞬間、アシュラーが猛然と跳びかかった。体ごと警備兵にぶつかり、物凄い唸り声をあげ、絶対に離すまいと手に噛み付いた。そして、ヒルトさんに「ここは自分に任せろ。すぐ逃

「アシュラーの目は必死にそう訴えていた。ヒルトさんは、咄嗟に車にもどり逃走を図った。そのときAK47が火を噴き左足に激痛を感じた。一刻の猶予もない。ヒルトさんは全力で逃走した。バックミラーから、遠ざかる後方ではなおも必死に戦うアシュラーが見え、やがて、最後に倒れて道路に横たわる姿が見えた。涙が止まらなかつた。アシュラー、有難う。ヒルトさんは見殺しにした慙愧の念に耐えかねたが、身を犠牲にして助けてくれた好意に応えるために必死でアクセルを踏んだ。そして、西側の検問所について途端意識を失った。次に気付いたのは病院のベッドの中だった。奥さんも無事助かったが、髪は強度のストレスから一瞬で真っ白になってしまった。ヒルトさんは左足を切断され義足となった。

お話を聞いてすべて納得できた。もう一年解放が早ければ全てが無事だったのだ。しかし、あまりの衝撃的な話に、そのとき私はヒルト夫妻にかける言葉を失った。慰めの言葉も、励ましの言葉も思いつかず、ただ、黙って頭を垂れるほかなかつた。

その後、暫くヒルトさんとは会う機会がなかつたが、1991年秋、再びご夫妻と御目にかかることが出来た。久しぶりに会ったご夫妻は驚くほど快活になっていた。開口一番「いいニュースと悪いニュースがある」と急ぎ込むように話した。ベルリンの壁が解放された翌年

参ります」「えつ、犬は生きていますか」ほとんど言葉にならなかつた。「ええ、かなり衰弱していますが、生きています」やがて、その犬が連れてこられた。一瞬、立ち止まりこちらを窺う様子だった。「アシュラー、私よ、私よ、アシュラー」夫人が叫ぶと、名状しがたい唸りをあげて夫人に跳びついてきた。「ごめんね、アシュラー。もう絶対離さないからね」アシュラーは夫人の顔を管め回し喜びを全身で表していた。「これで私も肩の荷がおりましたよ」ビンツガーさんは晴れやかにそう話した。あの事件のとき、ビンツガーさんは犬がまだ生きていたことを知っていた。すぐ知合いの獣医のところ連れて行き手当てをしたのだ。犬が大好きなビンツガーさんは家に連れて帰り、出来る限りの世話をした。だが、ほとんど餌は受けつけず、だんだん衰弱していった。体はやせ衰え毛並みもガサガサになり、かつての精悍な面影は全くなくなつてしまった。動物の中で自殺するのは人間だけというが、アシュラーは絶食に近い状態で、そのまま死にいたる道を選び事実上自殺を考えていたかも知れない。

「連れて帰ってよろしいですか」ヒルトさんがたずねると、「どうぞ、どうぞ、そのために私はいままで世話をしてきたのですから」それから一瀉千里にケルンまでアシュラーを運んだ。動物病院に入院させてできるだけだけの治療をおこなった。だが、アシュラーの体は一年もの絶食に近い状態

1990年10月、東西ドイツは統一され東西の壁は完全に消滅した。夫妻は、なにはさておきアシュラーの墓前に花を手向けようと思った。翌11月、脱出のときと逆に東に辿り、かつての国境ペブラをこえ、忌まわしい記憶の残るアイゼナハ付近に来た。確かにこの辺だ。きつとどこかに埋葬されているはずだ。ヒルトさんはそれを探そうと付近の農家を訪ねてみた。

「その話はみな知っていますよ。その犬は主人の脱出を助けるため銃床で殴られ瀕死になつてもなおも攻撃を止めず死ぬまで戦いました。さらに、警備兵が射殺しようとするのを隊長さんは、激しく制止し『犬には罪はない。それに主人を助けるため身を犠牲にした尊敬すべき犬ではないか』と直立不動の姿勢で、敬礼しました。そして、『この犬は私が連れてゆく。この件は一切他言無用だ』と話し、どこかへ運んでいかれたようです」「その隊長さんのお名前は解りますか、できれば住所も」必死になつて尋ねた。すると、「ええ、有名な方ですよ。もともと職業軍人ではなく大学の先生でした」

そのフランツ・ビンツガー氏はごく近所に住んでおられた。案内を乞うと、ビンツガー氏が出てこられ、「犬の飼主の方でしょう。お待ちしておりました。貴方がたが玄関に来られたとき、あの犬は跳び起き一声吠えたのです。いつもは、めつたに吠えることなどありません。今、連れて

と、警備兵との全力の戦いでその生命が燃焼し尽されてしまつていた。それにも増して最愛のヒルトさん夫妻と生き別れ生きる氣力を喪失してしまつていた。手当ての甲斐もなく、それから半年後、夫人のひざの上で安らかに瞑目した。四年半の短い生涯だったが、最後の半年はアシュラーにとつて何十年にも相当する至福の時間だったに違いない。ご夫妻に案内され私たちはアシュラーの墓地を訪れた。亡骸は大きなリンデンの樹の下に埋葬されてあつた。晩秋の散光をうけたリンデンの葉は、黄金色に煌き折からの風に舞い、なにかを語りかけるようにハラハラと墓石に降りかかつていた。墓石にはアシュラーの若かりしころの精悍な写真があつた。夫人は毎朝欠かさず花と水を捧げ、五分、十分、ときには三十分にもわたりその霊を叩いている。「彼女の心のなかには、いや現実にもアシュラーが生きているのですよ」ご主人はそつと話してくれた。墓標には次のように刻まれてあつた。

「家族にして、最良の友、アシュラー　ここに眠る」



松尾文雄

まつお ふみお

東京都東久留米市在住

1930年（昭和五年）大阪生まれ

77歳

和歌山大学経済学部卒業

1954 エーザイ株式会社入社

海外駐在15年（台北、ジャカルタ、シンガポール）

帰国後、海外事業本部長、海外担当役員（平成元年退任）

現在 翻訳業 企業金融

受賞の連絡があったとき、腰が抜けるほど驚き感激しました。まさか素人の私が入賞するとは考えてもいなかったからです。いままだ文学とはまったく無縁な私でした。四十年近く売った、買ったのビジネス人生で、文章を書くなど極端に言えば毎月の営業報告書ぐらいでした。退職後、サンデー毎日を楽しんでいた或る日、家内と、娘が「パパの話は面白いから文章にまとめてみたら」と、私を唆し始めました。多分、老人ボケを危惧したからでしょう。単細胞の私は、「よし、一丁やってみるか」と、すぐ乗せられ早速取り掛かりました。会社人生のほとんどを海外関係で暮らしたその体験を、五年がかりで整理し、まとめ、併せて文学、歴史、哲学、宗教、美術などの本を数多く渉猟し貪り読みました。すると、なんとなく自分らしい文章が書けるようになってきました。「じゃあ、ひとつ大海に漕ぎ出してみるか」と公募の雑誌を見ていたところ、「文芸思潮」のエッセイ公募が、ふと目にとまりました。その公募の趣旨をみて「これだ」と決め一気に書き上げたのが今回の受賞作品です。あまたある作品から、私の未熟なエッセイが選ばれたのは、文章の技巧など知らず、ただ自分の言葉で感じるままに書いた素人の新鮮さが評価されたのではないかと思います。荣誉ある受賞を喜ぶと共に、今後、ますます精進をしたいと考えております。

# ばあばの生きた証

第3回文芸思潮  
エッセイ賞  
当選作

## 堤かおり

Essay

私は「ばあばっ子」だった。「ばあば」とはひいばあちやんのことで、ばあばはとても優しく、温かい手の持ち主だった。何よりも私のことをとても愛してくれていた。子供ながらにその愛を感じ、だから私もばあばのことが大好きだった。でも弟はばあばのことを「魔法使い」と呼び、怖がって近付かなかった。片や私は、ばあばの杖を取り上げて「魔法の杖よ」と自慢して歩いた。それは今や近所の伝説だ。杖なしで歩けなかったばあばは道端で立ち往生することも多々あったといまだに聞かされる。

そんなばあばが私のそばからいなくなったのは私が七才の頃。ばあばの最期を私は覚えていない。気が付けば黒いワンピースを着せられてお通夜に出され、ばあばがいなくなったことを聞かされた。「泣かないでね、かおりちゃん。

ばあばが悲しむからね」と言われたが実感もなく、もともとと涙も出てこなかった。「火葬場に子供は連れていかん」と大人が話しているのが遠くで聞こえた。その結果、ばあばと仲良しだった私は置いていかれた。でも、ばあばの孫に当たる叔父が内緒で近くまで連れて行ってくれ、私は遠くからばあばの煙を見た。ばあばの煙は、空に細い線を描きながら昇っていった。

あれから二十数年の時が流れた。子供の頃の記憶は不思議なもので、断片的なくせに鮮明だ。私はその後も祖母からばあばの話聞かされて育った。だから、ばあばはいつも私の近くにいた。私が二十才の夏、日本は戦後五〇周年を迎えた。その頃からだ。祖母が私にばあばの話と一緒に、戦争の話をしてくれるようになったのは…… 満州で祖母



の兄が戦死したこと。その遺骨を引き取る時のばあばのこと。全て初めて聞く話だった。私だけでなく、私の父も母も聞いたことがないと思う。もともと祖母は戦争の話をしただけでなかった。それを知っていたので私もずつと聞けずいた。ポツポツ話し始めた祖母の視線から見た戦争。その時のばあばや祖母たちの行動。身近な人が語るそれは、どんな戦争映画やテレビ番組よりもリアルで生々しく、我が身に起こりうる可能性への恐怖を覚えた。祖母から話を聞いていると、心の真ん中あたりが揺られて、震動を感じるのだった。

ある日のこと。「この人は気が狂うと思った」と祖母はばあばのことを語り始めた。満州で亡くなった兄の遺骨を引き取りに行く時のばあばの背中は殺気立っていたという。そういうばあばの姿が私には想像できない。しかし祖母は、兄の死より目の前の母の背中の方が怖かった……と語った。戦死の通知を受けた時、ばあばは静かに聞いたのち、誰もいなくなると一人、畑の真ん中に立ち、大声で叫んだ。どこから発するでもない腹の奥底からあげられる、言葉にならない叫びを、祖母は畑のあぜ道で偶然聞き、驚いて顔を上げた。叫んでいるばあばと、それをただ聞いていた祖母。その場面を思うだけで胸が締め付けられた。

しかし、遺骨の引き取りから帰ってきたばあばは、背筋をシャンと伸ばし、凛とした表情で骨箱を抱えていた。「気たのではないか。私が考えても仕方ないことだけど、考えれば考えるだけ様々な思いが交錯する。戦争が奪った命の尊さや、もつれた運命の糸を思うと、心が苦しくなった。もつと幸せになれる人たちがいっぱいいたのに、と。会ったことはない人たちけど、祖母から話を聞くと、お虎姉さんたちが身近な人に思えた。その人たちの悲しい物語は、私の胸を締め付けた。シヨックだった。そういう救われないう物語がこの時代にはいくつ存在するのだろうか。」

それから時代は進み、太平洋戦争の時のことだ。祖母は結婚して、長男を生んだ。それが私の父だ。第二次世界大戦の終盤、父はまだ一才にもならない乳児だった。そしてちょうど祖母が畑仕事に出ている時、いつものように空襲の警報が鳴った。家に寝かしていた父をおぶって逃げたのは、ばあばだ。そして防空壕の中で事件は起きた。少し目を離れた隙に私の父が松の葉を飲み込んで喉に詰り、窒息死しかけていたのだ。警報が鳴り響く中、お医者様の元へ走ることもできない。祖母が防空壕に着いた時、ばあばは泣き崩れていた。「この子まで死んだら……」と声にならない声で嗚咽していた。息子を亡くした痛みを知っていたばあば。ばあばの嗚咽の向こうには、孫の死が頭を過ぎったと同時に、満州で戦死したまだ若い我が子の顔も浮かんだのではないか。いくら気を強く持っても、お国のためと思っ

が強い人やったけんね、吹っ切ったとやろうねえ」と祖母は語った。

後日、別の機会に聞いた話だが、祖母の兄の戦死の裏には、もうひとつの悲しい物語が存在していた。祖母の兄には、許嫁がいたのだ。「お兄さんは、なかなかのいい男やっただけんねえ」と祖母は自慢げに話した。許嫁の女性もきれいな人だったという。祖母が「お虎姉さん」と呼んでいたその人は、お兄さんの死後もずつとお墓参りに来ていた。誰とも結婚せずにお虎姉さんを心配して周りの人たちが他の男性との結婚を勧めた。お虎姉さんが望んでいたのか望んでいない結婚だったのかは知らない。相手の男性がどんな人だったのかも祖母は知らないという。だけど、その後もお兄さんのお墓にお参りするお虎姉さんの姿を見かけ、一度は「もう来ない方がいい」とたしなめたが、お虎姉さんはただうつむくばかりで、その後もたびたび姿を見かけたという。ばあばも祖母も、それからは見て見ぬふりを通した。お虎姉さんは相手の男性と離婚することもなかったが、子供をもうけることもなく、その一生を終えたと聞いた時、私は涙が溢れた。お虎姉さんの一生を思うと涙が出てきた。幸せな結婚だったのかも知れない。だけど、お虎姉さんの気持ちを思うと、同じ女として涙が溢れた。もしかすると、お虎姉さんの旦那さまも、そんなお虎姉さんの事を理解していたら理解する分だけ辛い思いをしてい

はどうか無事に一命を取り留めたが、ばあばはこの後、父に取り分け優しかつたという。だから、父の初めての子である私の事も誰よりも愛してくれたのではないかと、その話を聞いて思った。

私にこうやって、ばあばの話をしてくれる祖母も、今ではばあばの享年に追いついてきた。実家に帰省する度に年老いていく祖母の姿を見る。父も母も同居している弟夫婦も、祖母の話をまともに聞かなくなった。子をあやすかのように扱う。それが悪いとは言えない。現実の祖母の状況を聞くと、きれいな事では済まされないものがある。帰省した私に祖母は言う。「もうわたしや、ボケて何もわからんよ」。胸が締め付けられるが、「そんなことないんじゃない？」と軽く答えて私は隣に座る。そして「ばあばってさ、怒ると怖かった？」とたずねてみる。「そりゃ、もう……」と、堰を切ったかのようにばあばの物語が始まる。ばあばの人の柄の話、戦争の話……子供の記憶と同じで、祖母の記憶も断片的だが鮮明だ。

私は戦争を知らない世代に生まれた。私の両親でさえも戦争を知らない。でも私は、戦争を知っている人から直かに話を聞ける世代にいる。今この時代に生きている人たちがその最後の世代であろう。戦争を体験した人の声を、体験した人の言葉で方言で、その感情を直かに聞くことができる最後の世代。私たちには聞く義務があるのではない

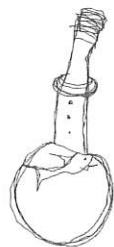
か。家族であればなおのこと。聞く義務は無条件にあるのだ。それは「義務」という名の「愛情」だと思う。「家族愛」だと。だって家族が経験した辛さなのだから。その辛さに耳を傾ける義務がある。胸を痛める義務がある。次の世代には、もうできないのだから。家族なのに、家族が味わった辛い経験を知らないなんて悲しい。それを知らずして、映画やテレビの情報でわかった顔をするなんてもつと悲しい。もつと大切な事実、もつと血の通った事実がそこにあるのに。もつと身近でリアルな戦争がそこにあるのに。

私は今日もばあばの話を書く。祖母はもうボケているのかもしれない。だけど、家族なんだから話を聞きたいよ。祖母は字を書けない。だったら私が「字」になりたいよ。私は戦争を知らない、語れない。だけどそんな私にもできること。そうよ、私が祖母の「字」になるよ！ そう決めていたのよ、二十才のあの夏の日から……！

記憶を残す手段。家族の持つている記憶を受け継ぐ手段。私は見つけたのよ。そして決めていたのよ、あの夏の日におばあちゃんがね、やつと私に話してくれたから。他の誰でもなく、私に話してくれたから。だから私は「字」になりたいと思ったの。祖母と私で、世代を超えて記憶を繋いでいきたい。ふたりで大好きなばあばが生きた証となりた。私が祖母の「字」になるよ。そして次の世代に伝えるよ。大好きなばあばたちの生きた証を。一呼吸一呼吸を丁

寧に「字」に変えて、ちゃんと次に生まれてくる私の子供に読ませるからね。ばあばたちの物語を、大切な家族の物語を……！

「ねえ、ばあばってね……、今日も祖母の隣に座る。話し始めた祖母の瞳には小さな粒が光っていた。その光る粒から私は目を逸らさずに、その粒も胸にしつかりと刻んだ。



つづみかわり

## 堤かわり

1975年長崎県壱岐市生まれ

福岡県福岡市在住

現在、「文楽出版社」に勤務し、9年目を迎える

九州・山口の旅行雑誌「外戸本（がいどぼん）」編集部在籍

## 受賞の言葉

## 堤かわり

幼い頃、平仮名を覚えると同時に母との交換日記がスタートしました。引っ込み思案で、家族にすら思っていることを口に出さなかった私のために始めたものです。欲しい物も欲しいと言えなかった私が、文章には書けました。「怒っている」「悲しい」「嬉しい」という感情も、不思議と文章には書けました。そうしているうちに、私は文章の持つ魔法みたいなものにかかっています。言葉は人を傷つける武器にもなり得ますが、傷をも治すお薬にもなります。幼い頃からの私の夢は、そのお薬を扱う魔法使いになることでした。

今、文章を扱う仕事に就けていますが、まだまだ「魔法使い」には程遠い日々です。そんな中、この賞をいただけて本当に嬉しく思います。何より、祖母が生きている間に、間に合った事が一番嬉しいです。この賞は、祖母と二人で受賞したのだから。授賞式では賞状やトロフィーがいただけのこと。そのまま地元を持ち帰り、祖母にトロフィーをあげたいと思います。たぶん、もう半分は意味なんて理解できないだろうけど、「私とおばあちゃんとして、や」と一人前で、もらえたんよ」と教えてあげたいです。き

と天国のばあばも喜んでくれます。私はこれからも字で何かを伝えていけたらと思います。

字は後世に残すことができます。そしてエッセイは文章の上手下手ではなく「生き様」そのものだと思います。「生き様」を文字に変えて残すものだと。今回、「戦争」を題材に書く時、正直迷いました。実際に体験された方々の血の通った文章にはかないような、と。だけど、「かないようなないから書かない」のではなく、これからその記憶を繋いでいく人間として、書きたいと思いました。今を生きる人に、「戦争を体験した人から直かに話を聞ける。私たちは最後の世代なんだよ」という事を伝えたくて。こんな私でもできることから始めたくて書きました。「今の私が何ができる……」「何を考えて、何を伝えるために、何が書ける？」、繰り返しはいけない歴史のために、平和について考えながら生きていきたい。人間は忘れる動物です。だからこそ文字にして残して、いちいち思い出して、その度に考えて……！ こんな私にもできること……ばあばや祖母の話を、まだ生まれぬ子にも伝えていくこと。小さな身近なことから始めます。でも一人一人がそれをすれば、決してそれは「小さなこと」ではなくなると信じて……！



兄かもしれないのだ。黙って見ておれるはずがない。見つけ出してやりたい思いはある、しかし、阻むように兄弟それぞれの家庭に問題が起き、父は高血圧からの脳梗塞で、体調を崩した。そうやって時間が過ぎてしまったのだ。これ以上父を興奮させることは避けねばと思いつつも、中にはただ「会いたい」の思いだけが走り出す。一つ違いの兄に会いたい、親の温もりを知らない兄に、生きていこうちに会わせてやりたいと思った。誰がどう拒もうと詭弁でしかない、それはこっちの言い分だ。彼は親に会いたくて養父母や仕事の様々な障害を乗り越えて日本へ探しに来たに違いない。写真の彼が兄ではなかったとしても、真剣に向き合わねばと思った。幸いに私は家を出ている。厚生省に事情を話し、第三者として再調査出来ないかと問い合わせて、正月休みというのに、年明けと同時に再調査の許可が来た。もう、とつこの昔に我々家族の全ての情報が記録されていたのだ。私が既に生家を出て養女になつていことも知っていた。兄弟関係ではないので兄弟姉からの委任状を取ってはじめて代理で再調査が叶うという。長兄も姉もそれぞれではない諸事情があつたが、動けないが全てを任せ出来る限りの協力をすると行って、霞ヶ関へ向かった。一度、親族が拒否したなら、情報整理をして親子だろうと確信を持って、動けないのだと言う。机の上の倒れそうな分厚いファイルに、彼が長年持ち寄つた資料に

ず見つけて涙する。感動する家族から一歩引いて目を伏せ私に誰が気付いただろう。生まれてすぐに親を離れた彼と、生まれて半年で親を離れた私……傍にい続けた私を判断すら出来ないのに、母は出産後会うこともなかった彼を泣いて迎えている。なんで？ わかりもしないのに……。再会に感動しつつも、無性に寂しくなつた。

その年の春、東京に住む彼、いや、「兄」は一人でやって来た。桜満開の公園を車椅子で散歩させようと、私は道案内を買って出た。どこか喜びを隠すように慎重に車を押す兄。寄り添うように歩いて歩く妹が、今まで味わつた事のない幸せを満喫していたのを気付いただろうか。その道で私は母と兄のツーショットを何枚か撮り続けた。兄はカメラを取りあげ「今度、僕が和子と母さん、撮る」と言つて私に車椅子を持たせた。妙な感覚だつた。私の手の中に母がいる。初めて身近に感じた母だつた。私にとつてたつた一枚の初めてのツーショット。桜の下を兄と二人で母を押し歩いて歩いた事に味をしめた私は、隙間を縫って施設から連れ出し、何度か二人の時間を持つた。私が誰かもわからぬ母と外を歩いた。

そして、この春、七分咲きの桜は寒空で震えていた。花冷えの日は続く中、日差しも柔らかく、吹く風も心地よい

託した親への思いを知つた。はにかんで入ってくる兄に思わず可笑しみが込み上げてきた。まるでコピーだつたのだ。と、共に、涙が溢れてきた。間違いないであろうはずがない……全ての仕草に父が重なつた。誰よりも自分に似た子を残してきた運命の悪戯に腹立ちすら覚えた。まさか、妹がいるなどとは思ひもなかっただろう彼は、不思議そうに見つめ、付いてきた家族に「二人は似ている」と言われ、やつと笑つた。彼の妻と長男が心から喜んでくれたのが救いだった。懺悔の思いが少し薄れた。もう、疑う余地はなかった。これが兄……これが甥……不思議な気分だつた。彼が私に尋ねた最初の言葉が「父さん、母さん、生きていますか？」胸が熱くなり言葉をなくした。まず、持ち込んで来た家族の写真を見せた。母の写真を食べい入るように見つめ、父の写真に、似ているとはにんだ。

そしてDNA鑑定結果を待ち、やつと両親の元へ夫婦で会いに来た。母は健在だが既に痴呆が進み誰だか判別できないので期待して来ないでね、と言つておいたのだが、彼が「ただいま。お母さん遅くなってすみませんでした」と手を取ると、あの痴呆の母が、まじまじと顔を眺め嗚咽し始めると顔をくしゃくしゃにして涙を流し続けたのだ。手をさすり肩をさすり声にならぬ声を発する。家族は皆感動して「おばあちゃんわかるの？誰かわかるの？」と問いかけるが、首をかしげる。それなのに、母は彼から目を離さ

朝を迎えた。今日を逃したら今年の花見はできないと思ひ、暮れから御世話になつていられる施設へ養母を迎えに行き、桜の下を歩いた。車椅子から花を見上げることもわからない養母だが、ニコニコしている。思わず写メールで撮る。その時、母にも花見をさせ写メールで撮ろうと思つた。とうとう、和解できないまま痴呆になつた姉と妹、せめて姉の写真と並んで残してやりたいと思つた。養母を施設に帰し、電車を乗り継いで母の元へ行つた。機嫌も良く、施設のドアを開けた時の冷たい風に「うわーお」と声を上げ笑つた。何だか楽しくなつた。春の陽気も手伝つたのか、話しかけると、母はニコニコと返す。桜の下で何枚か撮り、もうすぐ家族総出でやってくるという東京の兄に写メールで送つた。そして、あの時のように、母と私のツーショットを道行く人に撮つて貰つた。二人の母に花見をし終え、打ち上げ気分だつた。

そして、又冷え込んだ翌朝七時、兄の電話で母の死を知つた。こんな時つてこんなに冷静なんだろうかと思ひに思つた。歯を磨き、髪を整え、歩いて五分程の母の元へゆつくりと足を運んだ。苦しんだ様子もなく、穏やかな死に顔に安堵しつと思わず眩く。「何十年待つたのに、何でもうすぐ来る息子を待てなかつたのよ」と。なのに、もう一人の私が闇の奥で「これでおあいこだね」と眩くのだ。

始末に負えない女だ。

最後の最後に末っ子の私だけにくれた母との花見のひと時。死に化粧の母が「これでごめんね」と言ったように思えた。私は黙って「うん」と頷いた。これで、一つ幕が下りた。差し引きゼロの、私の人生の一幕が下りた。

人の運命ってほんとうに合点のいかないものだ。結局は……。

引き揚げ船に乗り無事親と共に帰り、ずっと傍で暮らして来ても、生活に追われ、長兄や姉が必ずしも温かな家庭で親に溺愛されて育った訳でもない。生まれたばかりの妹を妹と呼べなくなっても現実を小さな胸にしまい込み妹の私を見守っていてくれていたように思う。妹が貰われていった先が犬猿の仲の伯母の元では気まずい事も有ったに違いない。空気を読み顔色を見て生きる術を覚えた私も可愛い気のない子だったに違いない。あからさまに甘える術を知らない長兄と姉と私、しかし、母は産み落として六〇年会えなかった子を声を上げ嗚咽してまさぐった。母の中に残っていたのは、結局は、大陸に残してきた兄だけだったのかもしれない。でも文句は言うまい、きつと異国の大地で孤独を生きた子への母なりの「ごめんね」だろうか。

## 受賞の言葉

上村和子

投稿し始めて数年、初めてペンネームと作品に光を当ててやる事ができました。ありがとうございました。ずっとシナリオと向き合ってきた、エッセーとは何たるかも知らぬまま、生母の死（四月六日）で揺れ動いた気持ちを書き留めました。甘えることのできなかつた母へのレクイエムでもあり、一瞬でも生暖かい気持ち私が私の中に溢れた証でもありました。投稿後、養母も眠るようになれました。まるで妹が喧嘩相手を迎えて来たかのようにでした。向こうで「私のは？」と焼き餅を焼いているかも知れません。が、諍いがあるのはこの世だけと言います。向こうでは結構仲よし姉妹でいるのかも知れせんね。

シナリオで躓くたびに、文章書きに挑戦すべきか、シナリオに拘るべきかと迷ってきましたが「書きたい時に書きたいものを書けばいいや」と決めると気持ちが楽になり、このような嬉しい賞をいただきました。もう少し頑張れそうです。



上村和子

かみむら かずこ

本名 高垣和子  
1947年生まれ  
主婦・ダンス講師、小  
学校代替教員  
シナリオセンター

第10回大賞

エッセイ賞

優秀賞

## 海に咲く華

## 印南房吉

Essay

古田君に熱海の花火を誘われた。当時同年二十六才、湯河原の病院でベッドを並べていた闘病仲間である。彼は川崎の大きな石油コンビナートに勤務中、火災に巻き込まれて全身熱傷、四肢がそれぞれ枯れた梅の様に勝手な方向に振れてしまい、三カ月に一回のペースで手足を一本ずつ手術しては伸ばし、リハビリしては関節がよく屈伸

できるようにと訓練して三年、ようやく杖一本と自分の脚とで歩けるようになった。食事も自分の手で自分の好きな順序で食べられるようになり、退院できると大喜びしていた。長い廊下の突き当たりで嵌め込まれた大鏡を見て、

「こりゃあ蜘蛛踊りだなあ」と自分で笑っていた。私も一緒に笑って笑ってはみたものの目頭がジーンと熱くなった。とても他人事ではなかった。私も働いていた船上での

一瞬の事故で左脚を粉碎骨折即切断。義足をつけるために転院して来たが、義足にうまく合わず再手術しては歩行訓練に頑張っていたところである。

この病院は湯河原と熱海の県境を流れる清流・藤木川沿いに大きく両翼を上げた和風旅館を改装して医師四名、看護婦さん（白い天使、懐かしい言葉である）十二名、入院患者百余名、広いリハビリ室と温泉大浴場が特長の療養所とも云えた。他の病院での手術や予後経過が思わしくなく再手術・再整形しては徹底的にリハビリ訓練を行なっていた。だから患者さんの大部分は何らかの事故にあつて隻腕、隻脚、過度の熱傷ケロイド等々、一見不運の団塊集団のようには思えたが、人間は逞しい。不幸を吹き飛ばして目指す所は一つ——社会復帰。そのためにはお互いに助け合つて

障害を一つずつ乗り越えるいわば人生の戦友仲間だった。無論できることは自分でやる、できないことはどんどんやっつけて貰う、これが我々の協力であり友人たる所以であると訓示風に述べてはみたものの、社会復帰は並大抵ではなかった。

落ち込むと入院して来た日のシーンを鮮やかに思い出すことにしている。藤木川に掛かった橋を渡った正面が大きな破風造りの玄関で私がヨロヨロと松葉杖で入った時、イキナリ幅広い階段を下ドドドーンと飛ぶように駆け降りて来た若い人に驚いた。松葉杖を左右に抜けて鷹が舞い降りるようだった。ここまでやるんだ！ やれるんだ！ やらなきゃならないんだ！ それは今は古田君と三人の仲間になった落合君だった。前の病院では《カワイソー、若いのに》とダイジ、ダイジにされて来たのがいつべんに目が覚めた。早速松葉杖の突き方から教わった。松葉杖の上部を脇の下に入れて身体を預けるのはとんだ間違いで体重は両手で支えて杖でバランスを取るんだと云われてその場でもコツがある、あれこれやっているうちに皆が集まり出して時ならぬ講習会になった。気がついたら先生まで加わって領いていた。不幸不運は消えていた。

病院の二階の一番奥に女の患者さんが十人程入院していつその中に藤井さんがいた。十九才、きりりとした細身の

次から次に海から光が噴き出し漆黒の空に大きく開く光の華、遠いどよめき……沈黙……と、また海から火柱が噴き上げ二度三度と華が咲いた。クルクル廻った。

「アーツ、踊ってる！ 藤井さんだ！」古田君が叫んだ。二秒、三秒、消えた。残像がいつまでもいつまでも踊った。

急な坂道を二人でコツコツ下った。

「よかったなあ」……「うん、良かったなあ」

帰り道の小さな店でジョッキを傾けながら古田君が、「オレは精一杯、生きて来たんだ」ポツツと言った。そう、だよ古田君、僕ら精一杯なんだ、共感した。そう……いつまでも、今でも耳に残っている。

半年後、古田君は何度目かの手術後、逝ってしまった。精神力だけでは生命を支えられなかったのだ。短く辛い人生だったなあと思う。それでも彼は精一杯生きたんだ、人生って、こんなものかもしれない。そう、あの夕暮れの藤木川で、せせらぎで唄っていた日が目に浮かぶ。そうなんだ、あの海に咲いた華のような人生だったんだ。

美人さんで三才からヒヨコのようにバレエに打ち込んできたがとうとう足関節を傷め、手術の可否も含めて加療中だった。

「もうバレエは無理かな？」と言われ、最初はしょげて悲しげな目をしていたが、大勢で話しているうちに賑やかになり、公演して歩いた東京、横浜のあの劇場、この会場と名前が出る懐かしそうに頷いていた。キーキが大好きで公演打上げの日の一個がたまらない楽しみだったと白兔のように口を尖らせ目を寄せてクチュクチュと食べる真似をしてはコロコロと笑ってみせた。今はもう自由に食べられるんだけど、あんなに美味しいモンブランにはもう会えないわと急に涙ぐむ素直なお嬢さんだった。夕暮れ時、同室の人達とよく病院下の川岸にトコトコ降りてきて《アーニーローリー》などを合唱していた。すると何時の間にか古田君も輪の中で細い目を益々細めて幸せそうに唄っていた。夕陽とせせらぎが清冽な伴奏だった。まさに青春真っ只中だった。

その日、熱海の海岸をピッシリ埋めた人波と真つ暗な海を遥かに見下ろす坂道に二人並んで腰掛けた。毎年これが楽しみで来ていたと云う古田君の取って置きの場所だった。なるほど絶景である。街の灯りがあちこちと消えた。シウルシウル、ドーン！ パーン、パツ！ と始まった。



印南房吉

いんなみ ふさきち

1929年(昭和4年)東京浅草生れ  
24歳の時、事故で左脚切断後、(株)荏原製作所にて三十数年間、各種機械装置の開発に従事  
1989年ライフ・ケア機器研究所を設立し主として福祉機器用具の開発・商品化を行う  
現在、五百円で出来る福祉用具・自助具の工夫をしている

受賞の言葉

印南房吉

今住んでいる横浜では港まつりから始まって毎夏花火大会が五回もあり、港沿いの山下公園から海に浮く街《みなとみらい》にかけて人波と喚声がうねる。貰った花火カレンダーを机の前に貼って置くが大概忘れてる。

ドーンと遠い音が聞こえたと直ぐ窓に寄りかかって待つ。最初のうちは音ばかり、時々空が光る。がっしり高いランドマークの角型のビル塔が浮かんで消える。と、スーッと空に丸い華が咲く、次々に咲いてはすつと消える。暫くして遠く音が響く。時々ビルより大きな華が咲く。あーっと思う。花火の向こうで古田君が笑っている、目を細めてパンザイと小さく手を振り、この《海に咲く華》の受賞を喜んでいる……スーッと消える。そう、もう一人、藤井さん、海に咲いて踊っていた姿。古田君と並んで見ていた美しさ。花火は美しい。消えてなお美しい。

## 朝の電車で

栗谷京右子

二十代後半、私は東京都内の映画館でアルバイトをしていた。そこは私の住む最寄りの私鉄からJRに乗り換えて一駅のところであった。朝のラッシュ時にはあわせて約三十分、呼吸もままならない程のすし詰め状態で電車に乗らなければならなかった。

その日も遅刻ぎりぎりだった私は私鉄からJRに乗り換えるためのなじみの最短距離を足早に通過して、いつものドアに的確に滑り込んだ。出勤時間に間に合う最後の電車である。混雑の中、吊革につかまって目を閉じて呼吸を整えながら、この電車が次の駅に止まってからいかに職場のタイムカードまでたどり着くか、その段取りを考えていた。扉が開いたらすかさず下りて、予定通り目の前のエスカレーターを止まることなく駆け上り、改札を一番に抜け

て三十秒。そこから人をかき分けて職場まで急ぎ足で向かえば信号に引っかけかかって何と五分でたどり着き、着替えてタイムカードまで八分。電車も遅れていないし、うん、素知らぬふりで余裕顔まで作ってなんとか間に合う。など目をつむったまま考えていた。

その時、近くで子供がうなり声を上げるのが聞こえて私は目を開けた。

ラッシュの車中に子供がいることはめずらしい。人々に押しつぶされているかもしれない。子供に気づいていなかったとは……私は自分のことで頭がいっぱいだったことを少し反省し、その子の位置を確認しようとした。しかし見あたらない。よく見ると、子供だと思ったそのうなり声はすぐ私の前に立っている背の高い二十代後半くらい行く日には、朝早くから身支度を調べて母は私をラッシュの電車でその病院へ連れて行った。不安でいっぱいだったはずの母は何も知らない私を連れて、「帰りにはフルーツパーラーのパフェを食べよう、メロンのたっさんのつたや」と言ってくれた。

成長期、最も危険だった十五、六歳の時期をなんとか平和に過ごして、とうとう私の脳は頭蓋骨を飽和することなく、私は何とか今も普通に生きている。あのころの病院通いのいきさつを両親から聞いたのはその危険な時期が過ぎたからであった。

あの頃に、もし知的障害者になっていたら、今頃私と母もちょうどこの親子と同じくらいの年齢である。今も二人はまだラッシュの電車に乗っていたかも知れない。

私はバタバタした、だらしのない日常から、この朝この電車の中で突然にその過去を思い出すことになった。

突如私はひざまずきたいような気持ちになり、息苦しい胸で目をつむったまま本気で何者かに祈った。

「ああこの親子に満ち足りた時間がたくさんあり、満足できる人生がありますように。人々のいう、いわゆる『幸福』などというものの、どの形と同じでなくとも、彼らなりの幸せな人生がありますように。お願いします。お願いします。」

その時間はほとんど一分もないくらいだったと思う。し

の男性から発せられたものであった。一見して母親とわかる六十歳くらいの女性を手をつないで共にいた。その男性は知的障害があるようである。母親は我が子が人混みに耐えきれなくなつて騒ぎ出し、周囲の人からいつ迷惑顔を向けられないかと冷や冷やしている様子である。彼女は地味だけれど品がよく、優しそうだ。目の周りの小じわからは長年たいがい出来事には笑顔で応じてきたことがうかがえた。しかしやはりやつれて疲れきったところも見える。

私は胸が締め付けられるようになって、ぎゅつと目をつむりなおした。

私は幼い時、頭蓋骨の発育が小さいままで止まる病気だと診断された。

頭蓋骨の小さいことは身体が小さい頃にはそれほど問題ではなかったけれど、次第に大人になり身体や脳が成長するにつれて、脳が頭蓋骨の大きさを超えてしまう可能性があった。ある時突然に頭痛に襲われて目玉がぼろりと落ちこちってしまうかもしれない、そのまま視覚障害や知的障害が残ってしまうかもしれない、ひどい時にはそのまま死んでしまうかもしれないとまで言われた。

当時通っていたその病院は都内にある大きい病院で、外來は大変混雑するため何時間も待たされた。だから病院へ

かし私は時間に追われたその朝のこと全てを忘れて、本気でその時そのように祈ったのである。

電車はすぐにホームに滑り込んだ。扉が開く直前、私は目を開けてちらりとその親子を見た。

その時目にしたことは、私のそれまで信じていた世の中の成り立ちを以降あやふやなものにすることとなった。

その母親は驚愕して私を見つめていたのである。彼女は両目を見開いて、まるで旅先の異国の地で会うはずのない知人に出会ったような表情で私を見つめていた。私は逆に驚いて彼女の表情の中になにか納得できる意味を見いだそうとした。私の顔に何かついているとか、うっかり私が彼女の足を踏んだとか、そういう要因を探した。しかし彼女の表情にはそういった同情や批判といったものは見つけられなかった。そこにはただ絶望の淵で神の声を聞いたような、強い驚きと感激の要素しか見出すことができなかったのである。

私の祈りはあくまで口に出さずに心の中で唱えたものであったし、さらに私の生い立ちについて彼女は知るはずもなかった。そして電車を降りていこうとする私と彼女がしばし互いに驚きの表情で見つめ合った最後の一瞬。まさに電車を降りるその瞬間に、彼女はふかぶかと心を込めて私に会釈をしたのである。

その様子は先ほどの私の祈りが、そっくりそのまま、全

## 受賞の言葉

栗谷京右子

私はまだ三十一年しか生きておりませんが、今までの人生で、何とも説明のできない不思議な出来事がたくさんありました。

私はいっしょか、友人や家族や仕事、映画、音楽、文学作品、人に勧められて始めた趣味などといった、私が大好きな物事のすべてに対して、縁とか運とかタイミンングなどの「出会いの奇蹟」というものを感じるようになりました。

自分の周囲には、説明のしようのない何か大きなつながりがある、私はその中で、無力で小さな存在だと日々感じます。今回の受賞もそういったうれしいご縁の中の一つかと思われれます。

ここに書いたある朝の出来事は、私の心に残る、いくつかの中の一つです。毎日自分のことで精一杯の私が誰かのために祈るなどということは、なんだか傲慢なことに感じています。そのため、私のつまらぬ自意識がこれを誰かに読んでもらうにはまだ少し恥ずかしい気持ちにもなりません。

それでもこうして見知らぬ人々にお読み頂く機会に恵まれて、大変うれしく、光栄に思います。

文芸思潮編集部と選考委員の方々、読んでくださった方々に深くお礼申し上げます。

て彼女に伝わっていたと私に確信させるに足りた。私はそれ以来、人の強い思いは言葉や視線、表情といったものだけでなく、なにか空気を漂う「気」のようなもので相手の心に入り込み、伝わることがあると信じるようになった。



栗谷京右子

くりや きょうこ

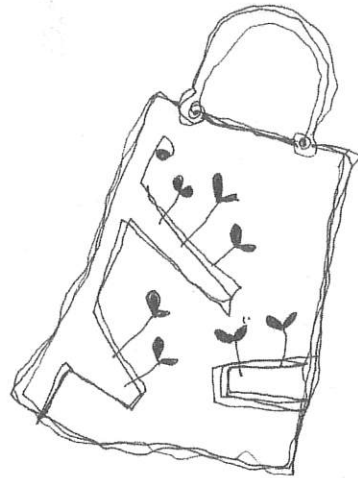
1976年東京生まれ。フリーター。文化施設に集まる人々を愛し、現在は図書館や映画館で働いている。心の恋人は水木しげる、串田孫一、岡本太郎、ゲーテ、F・サガン、ウディ・アレン、その他大勢。彼らといつどこでばったり出会ってもお話ができるように物事を深く考えておきたい。最近の興味は、図書館司書の仕事、古事記、日本世界の近現代史、釣りなど。

## 本の本

本への愛情がいったいどの本  
本が喜ぶ本の本  
こくのある文章の味わいは一級品  
本の手触りとぬくもりがここにある

福岡哲司

山梨ふるさと文庫  
1575円





## ペテロ島の蛇

岩本マリ

良き友の条件とは「物をくれる人か医者」だなんて、吉田兼好氏にはまったく賛成できやしない。そもそも「良き友」なんてシロモノほど退屈なものはないんじゃないだろうか。ともに学びともに分かち、わが身を顧みず助けの手をさしのべて、悪いことをしたら本気で怒る、だって。虫唾が走らあ。

「悪友」この蠱惑的な響き……、「これは」と見込んだ相手と共に落ちていく以上の快楽があるのか？ 堕ちながら覗き込むお互いの眼に映る、互いの姿。重力に従順に立っている「まともな」人から見ればさかしまのその姿こそが、お互いにとっての真実なのだ。

私にとっての理想の悪友は、すでにこの凡庸な人生に登場し、そして退場してしまった。先のことはわからないが、

(二人とも別に金に困っていたわけではないのだが)。

ある時は、ホームレスのねぐらに、あるじが不在のときにしのびこみ、彼の寝床であるマットレスを「殺風景だから」という理由で、つるぶどうの実で紫に染め上げたり、いやらしい本をこっそり盗み見したり。

またある日は、町中の落し物——靴の片方であったり、傘やライターなんか——を拾い集めて、架空の事件をでっちあげて捜査を進める。「容疑者」も上がっていた、もちろん濡れ衣だ。

この時は私もS子も非常に熱が入り、町中の空き家という空き家を片っ端から捜査(つまりは不法侵入)して回った。そのうちの一軒には、なんと人が住んでいて、お茶と菓子などふるまわれたこともある。上品な老婦人だったと記憶している。

学校ではなぜだか「四つんばいで走る」ことが二人の決まりになっていて(『我々は狼の末裔だから』という理由だった)、どんなに笑いものにされ教師に叱られても、狼と言うよりは猿の子供のごとく四つんばいで廊下を駆け回っていた。おかげで今でも四つんばいで走るの、かなり速い。

前置きが長くなってしまった。蛇の話をしよう。そんなこんなで、画家である彼女の父親——近所でも有

彼女以上の悪友に巡りあうことはまず難しかろうと思われるし、それ以上に彼女本人と再会し旧交を暖めるなどということも可能性はゼロに近いであろう。理由は後述する。S子は私が通っていた絵画教室の娘であった。私たちは初めてあった日から、一組の邪悪なさくらんぼのようにいつもいつしよにいて、常に何かろくでもないことを企てていた。

今考えても恐ろしいほどのパワーと企画力だったと思う。

ある時は、どんぐりで作った人形を、貧しいこどものふりをして同情をひきつつ公園で大人たちに売りつける。

彼女の家の庭を「どうぶつ園」と称して、ペットの亀や金魚や猫を見せて小さい子たちからお小遣いをまきあげる

名な変わり者——にすら、

「お前ら二人はなっ、一緒にいたらどこまでもダラクする相性やっ!」

と怒鳴りつけられた(この時に『ダラク』という言葉を初めて知った)。

私たちからしからぬことだが、近所のキリスト教会の日曜学校には欠かさず通っていた。もちろん敬虔なクリスチャンであるはずもなく、そこに通うのが何となく「オシヤレな行為」であると言う認識がその辺りの子供たちの間にあったからだ。

あるいはその胸の底には、救いを求める気持ち言葉にならぬまでもうずくまっていたのか？

教会の帰り、小川で遊ぼうと河原に下っていく途中、S子がちいさな蛇を捕まえた。まだまだ町には緑が多かった頃で、蛇はときどき見かけたが、こんなにちいさいのを見たのは二人ともはじめてだった。暴れるでもなくじっとS子の手に絡まって黒い目を見開いている。

「川の中に鳥を作って、そこで飼おう」

と言いつ出したのはS子だった。彼女は、どうやら蛇に魅入られていた。

二人で石やコケをかき集めて、浅い川の中ほどにバスケットボール大の島ができあがった。

島はペテロ島と命名された。ちょうど教会で聖ペテロの話を聞かされたからだ。

そこで、私もあなたに言う。あなたはペテロである。そして、私はこの岩の上に私の教会を立てよう。黄泉の力もこれに打ち勝つことはできない。(新約聖書／マタイ16章18節)

ペテロとは「岩」と言う意味であり、キリストが弟子ペテロを讃えて「その堅い信仰心を礎に教会を立てる」とおっしゃったのだ……と若い牧師が熱心に話した内容はうる覚えだったが、ペテロ島はいかにも頑丈そうで、宝物を隠しておくにはうってつけに仕上がった。

稚拙な牢獄を、蛇は悪くない隠れ家と感じたのか、岩の隙間から中に滑りこませると、おとなしくとぐるを巻いておさまっている。

なるべく自然の島らしく見えるよう、葉っぱやコケでさらなるカムフラージュをほどこして、我々はこのあたらしい秘密にどきどきしながら家に帰った。

秘密が何日間輝き続けたのかは、もう思い出せない。思いのほか短い期間だったと記憶している。島の孤独なあるじ——子蛇は、逃げようと思えばいつでも逃げられたのだろう。たまたま休養の必要があったのか、空腹ではなかつ

日が、蛇のなめらかにうねる背中を照らしている。迷いのないその姿はちいさな恐竜みたいだ。太古の昔から、生きていくすべを知っている、どちらに向かうべきなのか知っている、と言うような。

逃げる、逃げる、このまま、海まで。

こつそり蛇を励ましながら、私もあんな風に、時がきたらここから出てゆくのだ、と感じた。前触れもなく、優雅に、そして決然と。幼いエネルギーが昏く立ち込める胸のうち、子蛇はいつしか閉じ込められるのを嫌う自分自身だった。

紆余曲折と年月を経て、その思いは現実となった。あの子蛇ほど優美にとは、行かなかつたのが残念だけれど。

中学に入っただけ、S子は顔つきも、体つきも一気に大人の女性へと近づいた。ぼさぼさだった髪までもが、どうい魔法によるものか輝くような栗色の奔流に変化している。

動物を見るような目で私達を見ていた男の子たちが、S子のまわりに群がるようになった。ぶ厚い文庫本を持ち歩き、めつさり口数も減ったS子に置いていかれるような焦燥感にかられて、私はことさらに子どもっぽく彼女にまっわりつき、言葉尻をとらえ、難くせをつけた。

彼女は、わがままな妹を持った、我慢強い姉のように忍

たせいか、しばしペテロ島にとどまった。

その滞在が、そのまま我々の輝きの寿命であった。

終わりは、あつけなく訪れた。

石でできた牢獄の蓋を、私があけたとたん、まるでそうと決めていたかのように子蛇がずりりと滑り出し、川の流れにのって(文字通り)蛇行しつつなめらかに泳いでいく。

蛇が泳ぐ姿をはじめて近々と見た私は、つかまえるより何より、その優美さに見とれてしまったのだ。S字型を連続的に描きつつ身をくねらせ、どこにもがむしゃらさや力みがかがえないするどい美しさで、蛇は川を下ってゆく。

「何やってんの！早く追っかけて！つかまえてよ！」

S子の叫びが降ってきて(彼女はまだ土手にいたのだ)、我に返った私はバシヤバシヤと裸足のまま流れに沿って川を下りだした。もう追いつかないだろうな、と感じていたが、子蛇の泳ぐ姿をもっと見ていたかったのと、S子への義理で追っかけるフリをしたのだ。

それはS子に伝わったらしく、「あんたのせいやで！早く！早くつかまえて！」とヒステリックに叫んでいく。

川の流れは西に向かっていて、折りしも輝きを増した夕

耐強く接していた。

堤防が決壊を迎えたのは、ある昼休みの時間。

いつものように、しつこく彼女をからかっていると、S子はパタンと本を置いて低い声で宣言した。

「あんたなんか大嫌いだ」

互いに早熟で言葉に長けていた同士、その後は互いの心を切り刻むような、取り返しのない言葉の応酬だった。見かねた級友たちが止めに入ったけれど、二人は目を合わせることはなかった。

今でも思い返すたびに胸から血潮がふくようなこの記憶を、都合よく「思い出」とするほどおめでたい大人には、幸い私は育たなかった。おそらくは、彼女も。

大学を出て間もなく、折り合いの悪かった父と袂を分かつように、私は家を出た。

ペテロ島のあった小川は埋め立てられたが、あの小さな教会は今でもあると聞いた。

故郷の町には、もう一〇年以上帰っていない。

賞をいただき、とてもうれしいです。

この作品は、通っていたエッセイ教室で、最後の授業にと提出したものです。それまで毎回、「食べ物」だとか「恋愛」だとかのテーマをいただいで書く形式だったのですが、最後の授業だけは自由課題。なんでも自由に書いていいよって、逆に難しいな……と、湯船の中でぼんやりと考えていたときに（すごい長風呂呂なのです。もちろんぬる湯派）、潜在意識だか海馬だかが謎の働きを見せて、ほぼ完成形で文章が脳裏にカッチリ浮かんできたのでした。自動書記みたいに、そのまま書き写したのがこの作品です。

書かれている体験はもちろん自分の体験だし、手を動かして書いたのも自分なんだけれど、そういった成り立ちであるゆえ、いまひとつ「苦労して生み出した作品」という感じがしない。知らないうちに産んでしまった子どもみたいな……というのが正直なところなのですが、子どもの手柄は親の手柄。ありがたく受賞させていただこうと思いません。

また、ああいうカタチで何か思い浮かんだり、あるいは浮かばなかったりするのだと思いますが、文章を書くことは何らかの形で続けてゆくと思われます、大きな励みはいただき、本当にありがとうございました。

## 音

見られている。見られている。見られている。

身体の中の筋肉が固く引きつれた。首筋から背中一面にかけてが、木杵にはめ込まれたみたいにこわばっている。できることなら今すぐに、薄暗くて小さな穴に潜り込んで、息を潜めてじっと隠れていたかった。

冷たくこわばった身体に、何本もの視線の矢を突き立てられたまま、私は電車のシートに座っていた。鋼のように鋭い視線が、悪意を持った生き物のように、グググウーと鳩尾辺りに突き刺さってくる。

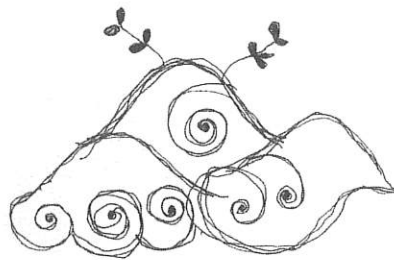
昼前の電車は空いていて、まぶしい初秋の陽光が車内に溢れていた。利きすぎたクーラーに冷やされた空気が足元を包み込んでいる。たった一人で、初めて体験する恐怖の前に立たされた子どものように、身体も心もその場に冷た



岩本マリ

いわもと まり

大阪府出身  
1994年 広告制作会社入社  
現在フリーの広告プランナー



## 丸山史

く固まっていた。

ティン ティン ティン テテティン ティン ティン  
……………

頭の中心から音が降ってくる。規則正しい音の中に、つまりまぐくような音を交えて、三ミリグラムの小さな金属弁が心臓の肉片を打つ。音はどうやら、心の深部と繋がっているようだ。緊張がごとごとく音の調子に現れる。そして、音の調子で緊張と混乱が深まっていく。音に促されるように、冷たくこわばった重たい首をギギイッと持ち上げ、回りを窺った。

触れない程度の間隔を開けた両隣には、男と女が座っていた。左隣の背広姿の男は、膝に乗せたアタッシューケースの上で、システム手帳に何か熱心に書いている。右隣のシ

オートヘヤーの若い女は、大判のファッション雑誌のページに目を注いでいる。視線の相手はこの二人ではなさそうだ。

私の瘦せた身体を包んでいる芥子色のスーツの胸元から、白いサマーセーターが覗いている。セーターの襟元からは、二センチほどの傷跡がかすかに見える。埋没方式で縫合された傷跡は、下に行くほど太くなり、赤黒いシミズのように胸板に張り付いている。だが、セーターから見える部位は、側によってつくづく見えない限り、誰も傷跡とは気づかないはずだ。

六人掛けの前の席には、幼児を連れだした若い母親と、うつむき加減に目を閉じた高齢の男が座っていた。幼児は小さな足裏を見せて、飽かずに窓の外を眺めている。そして時折、甲高い声を立てては傍らの母親の方に顔を向ける。ここにも視線の主はいそうにない。

だが、視線の生々しい感触は、時間が立つにつれて強まってくる。視線と音とは、旧知の間柄のように手を取り合っていて、威嚇するように私に向かってくる。音と私との関係は、まだ始まって一月ほどにしかならない。身の竦むような恐怖に耐えて、私は電車の座席に冷たく固まっていた。

五歳の時に患ったリウマチ熱が原因で、私の心臓に、僧帽弁閉鎖不全という病名が付いたのは小学四年生の頃であった。修学旅行に参加出来ない辛さは味わったが、日常生活

なんとかやり過ごし、短い眠りに潜り込めた。

身体自体は順調に回復し、九月の初めに私は退院した。手術の成功と順調な回復に安心した娘は、八月の末に大学のある南の地に帰っていった。一人暮らしの静かな家に戻ると、その時の来るのをじっと息を潜めて待っていた伏兵が、生命力に溢れて立ち上がってきた。

退院してからの三日間、生あくびばかりが出るのにほとんど眠れない時間の中で、私はただ音に怯え音を見つめていた。そして四日目、退院後初めての外来通院の日であった。初秋の光が溢れる電車の中で、私は壊れた。

視線の矢は緩むことなく突き刺さったままだ。ひりひりと熱いその感触を胸元を感じながら、私はやっと病院のある駅に着いた。自分の中で今、説明の付かないことが起こっている。この事実だけは私にもわかっていった。だが、どうすればいいのか。その判断ができたわけではない。判断などというところから、一番遠いところにいた。病院のベッドに横になりさえすれば……。その「すれば」に、ただしがみついていた。

その日からほぼ八カ月間、私は入院していた病院の精神科に通院した。初めの一月は姉の家に世話になった。後に聞くところによると、ふとしたことを引き金に、膨らんでいく妄想にからめ取られる妹を見て、姉は寝るときには、

活はむろんのこと、仕事や出産にもたいした支障はなかった。だが、四十歳を過ぎた辺りから、息苦しさという自覚症状がはつきり現れ始めた。勤務する学校での健康診断のたびに、弁置換手術を医師から勧められるようになった。

娘が七歳の時から母子二人暮らしになっていた私は、簡単に手術に踏み切れなかった。九十八パーセントの成功率だと説明されても、中学生の娘を思うと、二パーセントのリスクでも、私には大きかった。娘が大学に入学した年の夏、私は弁置換手術のために入院した。四十八歳の夏であった。手術は成功した。

術後八日目に、右腕に挿入された点滴注射を付けたまま、トイレと部屋との歩行が許された。点滴スタンドを押しながら、術後の痛みと息苦しさに堪えてよろよろとトイレに向かった。タイル張りの小部屋にはいると、胸の奥で鳴っていたメタリックな人工弁の音が、ふいに鋭角的に私を貫くように鳴り響いた。これまで自分の身体の記憶になかった機械音に、私の脳は脅えて竦んだ。音は私にとつて、思いがけない伏兵だった。

その日以来、三ミリグラムの人工弁が立てるメタリックな音が、終日私を脅かすように鳴り続けた。六人部屋の病室には人の出入りが絶えずあり、私の周辺には、様々な音が雑多な色合いで存在していた。病室での私は、自分の周辺の音に気を散らし、襲いかかってくるメタリックな音を

家中の刃物の類を隠したということだ。私を一人にすることに危惧を抱く姉は、家にハイヤーを呼び病院に付き添って来た。姉は食卓の前に座って、私が薬を飲むのを見届ける。精神安定剤は私のすべてをゆっくりモードに切り替えた。話す言葉も動きも思考さえもが、スローダウンしたように感じられ、自分が自分でなくなる恐怖の中に私はいた。私は姉の保護にしがみつき、もう一方で保護という抑圧から逃れたいと感じていた。

このまま姉という保護者の側にいたら、私はどうなるのだろう。管理されることに馴れた私は、どんな顔になっていくのだろう。能面のように表情を押し隠した顔が浮かんで来た。いっそ一人になって、妄想と幻聴に捕らえられ怯えに顔を引きつけているほうが、自分に近づけるように思えた。一生、姉ちゃんの世話になるわけにはいかんやろ。心配する姉を説き伏せ、私は一人の家に帰り、音と向き合った。

年が変わり、新年度が一月後に迫っていた。もうその頃では、薬を必要としなくなっていたが、私は通院していた。精神科医に話すことを通して、自分を再生しているような気持ちになっていた。

「この音にずいぶん苦しめられましたけど、同時に、音によって出会えた世界もあります。その世界が、どんな意味を持つのかまだわかりませんが、漠然とですが、意味あるも

ののような気がします」

「そうでしょうね。心の中は見たり触ったりできないものですから、早急に結論づけることはできませんよね」

「音の響きに打たれることで、もう少し奥にある私の何かが見れるみたいで……」

「ある詩人の言葉なんです。『結局は本当の裸には誰もなれないわけだけれども、自分の一番深いところにある自己に無限に近づいていくことは可能だ』というのがあります。音によって深い自己と対面させられているのかも知れませぬ」

ある日の精神科医との会話である。新年度の四月から、私は職場に戻り生徒の前に立った。どの子の顔も内から輝くように美しかった。

あの日々から十六年が過ぎた。音は今も私の中にいる。



丸山 史 まるやま ふみ

本名 南野陸子  
1943年大阪生まれ  
大学卒業後、現在も非常勤講師として私立高校で働く。  
『東大阪文学』の同人として小説の基本を学ぶ。  
昭和61年度 女流新人賞受賞

私がこのエッセイのもととなるノンフィクションを書いたのは、十六年ほど前のことである。術後精神疾患の中で自分に現れた妄想や幻聴の意味を問い、新たな自分を再生するために、どうしても必要な行為だった。一年後、書き上げた原稿は引き出しにしまわれた。

そして、十二年が過ぎた。森鷗外記念事業として北九州市が公募している『自分史文学賞』を知った。二百五十枚ほどの作品にして応募した。最後の二十三作まで残ったが、受賞には至らなかった。他者に読んでもらう機会はもうないだろう、と諦めた。

だが、諦めきれなかった。削りに削って十枚のエッセイにした。それが、優秀賞を受賞し、雑誌に掲載されるとの連絡が入った。人生の後半で思いがけない出来事に遭遇した。その体験が、後半生の私の核となっている。雑誌に掲載されることで、多数の方に読んでいただける。この上ない喜びである。ありがとうございます。



第3回文芸思潮  
エッセイ賞

優秀賞

## ソメイヨシノの奇跡

高橋由美子

Essay

今年も桜の花が満開になり、一〇年ぶりに車で三〇分の桜の名所へ出かけていった。混雑する所がきらいな私は、いつもなら近所の公園の桜を見て満足しているところだ。

しかし私は、桜をカメラに閉じ込めて、おばあちゃんに見せたかった。

桜は、日本人の感じる独特の風情あふれる樹である。おばあちゃんに、生きる力を感じてほしかったのだ。

「燃えるように熱いのよ。それが時折ズキンと痛んで頭の上まで響くの……」

一週間前に急に皮膚の痛みを訴えて、おばあちゃんは義理の父と病院に行った。

その日の夜、食事を持っていった私に申し訳なきそうに言う。

「薬を塗ってほしいの」

もう九二歳になるおばあちゃんは、左手が不自由だ。病院から処方してもらった軟膏を取り出し、ぎこちなく服を脱いだ。

その瞬間……。私は声を失った。白くてしわだらけの右肩やうでがただれて、ぐちゃぐちゃになり、そのただれが点々と手首にまでひろがっている。

思わず目をおおいたくなる光景だ。一度深呼吸をしてから決心をし、軟膏を指先に絞る。おそろおそろ一番ひどい部分にべたりと薬を置いた。体温が直に手に伝わってくる。指先には、膿と血の混じった汁が付き、それが軟膏と混じりピンク色になる。

不思議なことに頭の中はどんどん冷静になってきて、私

の手は機械的にせつせと薬をすり込んでいく。

「おばあちゃんひどいね。痛い?」

「ここが……特に熱いのよ。痛くて夜も眠れない。ああ、うでが重苦しい……」

ぐつとうでを上げてわきの下を見せる。だらんとおっぱいが下がる。そこは肩ほどひどくはなく、褐色の斑点が大まぼつぼつあるだけだ。しかし、よく見ると少しえぐれている。

神様つて無情だ。九〇歳をとくに過ぎたおばあちゃんに、こんな試練を与えるなんて……。おばあちゃんは痛さで食事もとりにくくないという。

手首まで、塗り終えた。

「ああ、少し楽になったよ。ありがとう。」

「うん、また明日塗ってあげるね。」

ピシャンとドアを閉めると、私はまっすぐに洗面所に走っていき、石鹸で何度も手を洗った。ぬらぬらとした感触がまだ消えない。

おばあちゃんは、左の手足が不自由とはいえ、自分のことは、大体自分でする。私は食事のお膳を運ぶくらいで介護らしいことをしたことがなかった。

おばあちゃんの若い頃は戦争もあり、それは大変な苦勞だったそうだ。家族も多く、家事に田畑の仕事と、働き詰めの人生。体が弱った今だから、望むことを快くしてあげ

そんなおばあちゃんだったのに、この病にかかったとたんに急に元気がなくなり普段もずつと寝てすごすようになってしまった。

夜、食事を持っていくと縁側のカーテンを開けてよく月を見ている。

「寒いんじゃない?」

私が心配すると、おばあちゃんは首を振りながら静かに答えた。今は亡きおじいちゃんが戦地に行くとき、こう言っていたそうだ。

「お月様は世の中に一つしか出てないだろう。」

このお月様をほくは戦地の空の下で眺めているからお前は、この縁側で見ているように。そうすれば、二人近くにいらる気持ちで暮らせるだろう」

おばあちゃんが、結婚してまだ数ヶ月の早朝に「動員動員!」と言う大きな声に飛び起きたら、おじいちゃんが「あやはいり来たか」と赤い紙一枚を手にしたそうだ。まぎれもない召集令状だったのだ。

そのときおばあちゃんは妊娠二ヶ月。その年の十二月の初め、自分の夫の戦死という悲報が入り、悔しいやら悲しいやらで涙もでなかったそうだ。

またある日、おばあちゃんはこんな夢を見たと言っていた。自分と夫の両方の両親たち、実家の兄、そして夫が登場したそうだ。

なければいけないというのに……。いざ軟膏を塗るぐらいで、ちゅうちょしてしまふ自分が情けなかった。

おばあちゃんは、週二回のデイ・サービス(高齢者介護施設)に出かける以外、日中は部屋の縁側のソファで編み物をしたり本を読んだりして過ごす。おばあちゃんと話をしている内容がすっかりしていて、大正生まれのプライド高き女を感じさせる。

子どもたちに貸してもらったミステリー小説だつて「面白いのお」と言つて読む。

また、歌の腕もナカナカのものである。

『亡き友の 昨夜の夢は笑顔なる ありし日偲び 一人うるめり』

『正月に カルタ取り乞うひ孫たち 字も読めずして取る手の早し』

デイ・サービスの広報にも掲載されるほどだ。

しかし、反面涙もろいところもある。デイ・サービスの帰り、送迎車のむかえに出た子どもたちに車いすを押してもらっただけで、うれしそうに涙ぐんでいた。

めつたにかぜをひかないおばあちゃんだが、この冬三日間も高熱が続いた。熱さまシートをおでこに貼ってあげると、「便利な世の中だのお」

と妙に感心をする。みんなの心配をよそに本人はけろりとのりこえた。

「夢を語ると鬼は笑うという昔の格言があります。昨夜はみんな楽しそうに座談をしていたんだ。亭主のあの格好といたら……。本当に結婚当時の、あのうれしそうな笑顔だった。

でも目を覚ましたときの悔しさ、情けなさ、悲しさといつたら……。胸が詰まってしばらく泣いてしまったよ」

悲しそうにそう語る。

すっかり気弱になったおばあちゃんは戦死したわが夫の仏壇に向かって

「早くおらもつれて行って……」

とつぶやくのだ。

「大丈夫だよ。皮膚だつてずいぶん良くなってきているんだよ」

毎日私は、おばあちゃんのうでに軟膏をすり込んだ。一週間ぐらいすると、ただれた部分は5ミリぐらい盛り上がったかさぶたになりはじめた。さらに数日後に、はじのかさぶたがはがれてきて、そこには薄いピンク色のきれいな皮膚が再生されている。日に日に回復し始め、褐色の斑点もピンク色になってきた。

私は正直、感動した。人間つてこんなにもすばらしい生命力を持っているのかと……。生きるということとは、こんなことなのだ。神様が生を許してくれる限り、体はきちんとそれに答える。年老いていようが再生能力は備わってい

るのだ。

この春、私の長女は中学校に入学し、三女は小学校に入学している。制服に身を包み、ぐっと大人びた長女。ぴかぴかのランドセルを背負ってうれしそうな三女。

「桜はもう咲いたかのう」

子どもたちの後姿を見守りながら、おばあちゃんはつぶやく。

そして休日、外は久しぶりの快晴となる。私は迷わず子どもたちを誘ってハンドルを握った。駐車場に着くまでも桜は、これでもかというくらい咲いていた。

「うわあ、きれいー！」

子どもたちがはしゃぐ。(よしよし。子どもたちよ、車止めたらいくらでも桜が見れるからね) 普段忙しく、買い物ぐらいいしか連れてやれなかった私だ。おもいがけず、罪滅ぼしが出来たと、内心満足する。

車から降りると、まだひんやりした空気の中、桜は薄い青空に品よく映える。短い命を惜しげもなく豪勢に咲き誇る。

「お母さん、日本一大きなソメイヨシノだって。ここからまっすぐ歩いて二〇分て書いてあるよ。見たーい！ 行こうよ」

次女が看板を指差し、私の手を引っ張る。桜の花は満開で、薄い桃色のトンネルがどこまでも続く。二〇分位歩い

ただろうか。

「あ、あれだ！」

その日本一のソメイヨシノは堂々とたたずんでいた。太い枝を大きく広げ、樹全体の直径は一〇メートルもあるかと思われる。いろんな時代を生きてきた貫禄を感じさせる。

若い樹に負けまいと、少しすすんだ花をばらばらと咲かせている。とてつもなく豪華な桜を想像していた子どもたちは肩透かしを食らったような顔だ。

花の美しさでは若い樹に負けてはいるが、しかし、これまで何百年と美しい花を咲かせ続け、どれだけの人々の心を癒したことだろう。

おばあちゃんの背中も同じである。いろんな歴史を背負い込んでいる。そこにいるだけで、存在の意味があるのだ。命があるのは、まだこの世に必要とされているから。

奇跡の脱皮をして若い肌に生まれ変わったおばあちゃん。どうか、生きることに自信を持って。あのソメイヨシノのように老いることを恐れずに堂々としていてほしい。

…ピロリ…

夢中でシャッターを切っていると、三女の首にぶら下がっているたまごっちまで生まれ変わっているではないか！ 桜って生を生み出すパワーを持っている！

(帰りは、すぐに写真を現像して帰ろう……)

私はおばあちゃんのほころぶ笑顔を想像しながら、カメラを大切にバッグにしまったのだ。



高橋由美子

たかはし ゆみこ

1964年青森県生まれ  
会津短期大学デザイン学科卒業  
アイリスオーヤマ(株)グラフィックデザイン部所属パート勤務  
エッセーや児童文学などを書き始めて2年目  
日本文学館はがきコンテスト/審査員推薦賞  
青い鳥文庫こわい話大募集/一次通過

## 受賞の言葉

高橋由美子

祖母と私は、交換日記をしています。日ごろの悩みや出来事、また昔の出来事などいろんなことをお互い書いています。

私は、戦争のことは知らない世代に育っていますから、知っている人から聞くことはとても大切なことだと思いますし、また次の世代へと伝えていくことも、重要だと思えます。

生活が楽になり、贅沢な世の中です。でも、それは本当に豊かだといえるのでしょうか。不便だからこそ家族で協力し合ったり、助け合ったりすることもたくさんあります。

私自身、育った家が農家でしたから、米の収穫の時期は夜まで田んぼを手伝い、帰りのトラクターの荷台から星空を見たものです。

その星空は、家族の一員として役に立てた満足感の象徴として今も鮮明に覚えています。

私はそういった自分の思いを、文章で伝えていきたいのです。そして今回の賞はそんな私に自信をつけるものとなり、また今後の糧にしていきたいと考えております。

仕事と主婦の二足の草鞋で日々忙しいのですが、だからこそ文章を書くということは私の心の支えでもあります。今回の作品には、祖母の言葉がいろいろ盛り込まれており、そのひとつひとつのことが受賞に結びついたら、祖母に感謝しております。

つたない文章ではありませんでしたが、私の作品を選んでくださった選考委員の方々、本当にありがとうございます！



おばあちゃんと孫たち

## 少女の視線

桐ヶ谷忍

良心はどこにあるかと問われれば、人は何と答えるだろう。脳に、胸に、ここに。言い方は違っても、多数の人は己の体内を指すだろう。

私の良心は体外にある。

私の頭の後ろに、ふわり浮いている少女が、私の良心そのものだ。

別にオカルトでも何でもない。人格障害の一種だ。

私の中にあるはずの良心が、少女というカタチを持ち、体内から出て行ってしまった。異常といえば異常だろうが、医師に話して初めて知った程度の認識しかない。

うつ病にならなければ、異常という自覚さえなかった。

私の中の私が人格を持って、体外にいる、という症状は

これで二回目だ。

一回目は十代の終わり頃だった。

その時体内から離れてしまった私の人格のひとつを、私は「監視者」と名づけていた。

「監視者」は、私の一挙手一投足全てについて、嘲笑し、罵倒し、冷やかな視線を、寝て意識を失うまで、浴びせ続けた。

何事にも厳しかった父が、温和になり始めた頃からだ。父に取って代わるように、私を終日監視するようになった。極端に言えば、右足から歩けば、右足から歩いたことに冷笑する。他人と話せば、その話している時の表情、話し方、声の高低、視線の置き場所、しぐさ、ともかく他人に映るであろう私の全てを私に伝え、そのいちいちについて

嘲笑するのだ。それが寝入る前まで毎日続く。

それこそ頭がおかしくなりそうだった。

だがおかしいと思いきすれ「異常」だとは思わなかった。普通の人はこの風な現象は起きないだろうこともきちんと認識していた。だが、おかしい体験をしているとは思った。他人が経験しないことを経験しているということに、おもしろく感じていた。

一度だけ、母に話したことがあった。夕飯の料理中の母の背中に向けて、「監視者」がいる、と。母はちよつと振り向いたが、冗談か何かだと思ったのだろう。特に何も言わなかった。

「監視者」がその時私に向けて言ったことを今でも覚えている。

「お前の戯言など、誰にも受け入れられやしない。馬鹿な女だ。他人に理解を求めるなんて」

それ以降、誰にも話さず、私は監視されていることにひたすら耐えた。

だがその「監視者」も、一年を越えたあたりから少しずつ無言になり、私の等身大だったその体も萎んでいき、最後はちいさな光のようになって、背中から心臓のあたりに向けて吸い込まれるようになっていき、気が付けばいなくなっていた。

いなくなったことに気がついた時、やっと逃れられたと

いう安心感と、一抹の寂しさを覚えた。

それから約十年もの間、私はやはり異常だったという認識も持たず、平凡に会社に就職し、趣味の詩作を通じて人と出会い、結婚し、幸せな未来を手に入れた主婦になった。なったと思った。

幸せだった結婚生活は、三年で壊れた。

「監視者」が、私の立ち居振る舞いを馬鹿にしていたように、私は他人に映る自分が馬鹿にされているという強迫観念を常に持ち続け、人間嫌いの女に育て上げた。

その人間嫌いだった私を愛してくれた夫に、私は、本来ならたくさんの係わりを持つ他人に分散されるであろう愛情を夫ひとりに向けた。

今思えば、集中攻撃となんら変わらなかった。

夫は、息苦しくなったのであろう。疲れて会社から帰宅すれば、飼犬が喜びを体全体で表して出迎えるような妻が待ち構えている。平日も休日も関係ない。どこまでもじやれ付いて回る妻である私に対して、愛情をかすれさせてしまう結果となった。

「一ヶ月でいいから、一人暮らしをしたい」と言って、夫は会社近くのマンションマンションへ逃げるように出て行ってしまった。



ひとり、自宅に残された私は、あれほどに愛した夫を失うかもしれないという恐怖に毎日泣き暮らし、次第におかしくなっていた。

まずテレビが見れなくなった。ニュースを見れば連日報道される事件に恐怖で泣き、お笑い番組さえ、テレビの向こうには大勢のひとがいる、省みて私はどうだ、ひとりだ。笑うどころじゃない。孤独感を際立たせるテレビのコメントを引き抜いた。

電話が鳴れば、セールス。呼び鈴が鳴れば、セールス。電話線も引き抜き、乗客にも一切応じなかった。しんと静かな部屋で、趣味の読書で気を紛らわせようにも、涙で読めない。食欲もなくなり、意識を飛ばそうと寝ようにも、眠れない。眠れても浅く、しかも悪夢ばかりを見た。唯一ここを和ませたのは、ネットの自殺サイトだった。いかにしてラクに死ぬか。悪夢を見て当然のサイトを見てばかりで、ただただ泣くばかりの生活を一ヶ月弱。私は、うつ病になった。

あまりにも眠れないことに堪えきれなくなり、家の近くの心療科で睡眠薬をもらいに行った。

そこではじめに告げられたのは「不安神経症」だった。この病院にはその後一年ほど通うことになったが、いつ

頭の後ろに、何かいる、と思い始めたのもこの頃からだった。

その何かに、見つめられている。

「監視者」がまた出てきたのかとも思ったが、その何かは無言のままだった。

それよりも帰宅した夫と再び生活するようになったことで、私自身もコントロールが効かなくなっていく自分に振り回されるようになっていた。

当初は夫も、私を気遣い、なんとか治るようにと励ましてくれていた。だがそんな優しさも私には効かなかった。治す気がない上に、時間を経るごとに私にもどうしようもなくおかしくなるばかりだった。神経症の薬は効いていなかった。

次第に喧嘩をするようになった。始終泣いてばかりの私に、夫も苛立つようになってきた。

離婚しようと言いだしたのは、主人の方が先だった。

だが、そうは言っても計算どおり夫には、自分が悪いという思い込みがあった。

死にたい、もう嫌だ、と泣いてばかりの私に、ある夜主人が言った。

「もう疲れた。一緒に死のうか」

行っても患者は私一人だった。本当なら患者が一人もないとはどういうことかと考えるべきだったが、睡眠薬さえもらえれば何でもよく、悪夢を見ずなるべく長時間、出来るなら一日中眠っていたかった私は、ヤブだということに気がつかないままだった。

「不安神経症」。

うつ病よりは軽く、平常よりは重いという微妙な病名だったが、それを告げられた時、私は心の中で狂喜していた。病名がついた。しかも精神に。嬉しくてならなかった。あの時はつきりと私は確信した。

これで夫を繋ぎとめられる、と。

離れて暮らしている間に妻を精神的に追い詰め、病気にまでさせた夫。

一生治らなくていいとさえ思った。

病気でいる限り、夫は私の傍にいる。

メールで不安神経症になったと送信している最中、泣きながら笑っていた。ザマを見るとまで思った。病気になるほど夫のことを愛している証拠になると思った。

夫からはすぐにこちらに帰宅する、と電話がきたが、その必要はないと、約束どおり一ヶ月一人暮らしをしようとして断った。その方が「けなげな妻」を演出出来ると馬鹿なことを考えていた。

愕然とした。

あの、病気がもつとも悪かった時期、私は本気で死にたくなっていた。だが夫を道連れにしようなどとは思っていかなかった。まだ若い、将来有望な夫を、自分のせいで殺すような真似は断固として出来なかった。

首を振る私に、夫は笑いながらどうやって死のうか、などと話しかけた。

それまでの生涯、最大の修羅場になった。

痛いのは嫌だからどこか高いところから飛び降りようか。なんてことを言うのだ、と私は必死に止めた。何をどのようににどちらが言ったのか、もう覚えていない。ただ、怒鳴りあった。真夜中の午前三時に悲鳴のような声を張り上げて止める私と、自分だけでも死なせろと絶叫する夫。

夫は決して自分から死にたいなどと言うタイプではなかった。

どうやって止められたのかもよく覚えていない。

ただ、それから間もなく私は実家で世話される身となり、

夫はまた一人暮らしの生活になった。

あの修羅場以来、治りたくなっていた。

だが、いくら本気で治そうとしても、治るどころか、実家においてさえどんどん悪化していった。

そんな私を見るに見かねた母に、自宅近くの病院ではない、実家近くの心療科へ連れて行かれた。

驚いた。決して狭いとはいえない待合室にあふれる患者たち。待ち時間で小説一冊読み終えられてしまうほど待たされるだけの病人だ、人、人。

誰もおかしな顔つきをしていた。自宅近くの病院とは雲泥の差だった。これほどに病人だ人々を一堂に見たことなどなかった。何なのだと思つた。こんな、おかしな人たちと同類なのか私は。嘘だ、少しおかしいくらいで、まともだと必死に抵抗した。

だが、診察の結果は、うつ病。

初めて正しい診察をされた結果が、うつ病。

医師に今まで服用していた薬だと見せた時の、医師のあの、こんな薬じゃ治らなくて当たり前だと言われた時のショック。一年もの間服用し続けた薬が全部無駄だった。悪化して当然の処方。

おかしくて、泣きながら笑つた。治るのに最低半年、だがあくまで治れば、の話だ。うつ病について調べれば調べればほど、何年も何年もかけて、やっと治せた人の手記、治る前に自殺する人、死ぬまで治らないままだった人。

泣きながら笑う。そんなのはドラマの演出で、実際にはそんな風な悲しみ方をする人間がいるものかと思つていたが、自分が現実そのものだった。

実家に預けられ、生涯この人と生きるのだと誓つた人から離婚を申し渡され、会いにも来てくれない夫。短期間で

医師に告げた時、それは人格障害の一種だと言われた。ではあの「監視者」も人格障害の産物だったのか。

十年間が音を立てて崩れるような衝撃だった。病気を病氣と捉えずにいた私の十年間は病んだ心の上に蓄積されてきたのか。どこかが狂つたまま、平然と生きてきたのか。

その瞬間から、一番信用できない人間は、私になった。自分で自分が、どこまで正常なのか混乱して、リスカはますますひどくなった。と同時に薬も増え、昼も夜もなく眠らされている時間が増えた。食欲もなく、三十キロ代にまで痩せこけた。

だが、通常そうそう治らないうつ病は、たまたま私に一番正しい処方になされたのだろう、少しずつではあったが、希死念慮は薄れていき、リスカの回数も確実に減つていった。

少女のまなざしも、それに連れてやわらかくなつてきた。

リスカをして父を、母を泣かせるたびに、平然としていた私とは裏腹に、少女は申し訳ないともいうように一縷になつて泣いていた。私の代わりに少女が謝罪しているよな、おかしな妄想。

今、私は治りかけのうつ病患者として通院している。

治る人の方が少ないと思われる精神病。泣いているはずなのに笑いがこみ上げて、枕に突っ伏しながら、ひとりで幾度となく泣きながら笑つた。

実家での療養生活は二年に及んだ。その二年で、私はリスカの快楽を知つた。

最初は、せめて家事の手伝いをしようと洗い物をしている最中に湯飲み茶碗を割ってしまった時だった。一かけらだけ取つて、部屋で切りつけようとした。だが、切れなかつた。ガラスだったら切れていただろうが、陶器ではせいぜいミミズ腫れになる程度だった。

翌日、洗面所に置いてあるカミソリで切つた時、何か癒しのようなものを感じた。それまで溜めに溜め込んだストレスが血と一緒に流れていくような錯覚をした。

気が付いた母が悲鳴を上げて止血をしてくれたが、次はもっと深く切ろう、とぼんやり決めていた。

この頃からだった。頭の後ろのずっと無言でいた「何か」がカタチ作るようになってきたのは。

少女だった。

少女に見つめられている。あどけない顔で必死な視線でじつと、無言で見つめてくる。

少女が何を意味するのか、私には当初わからなかつた。

自分から夫と離婚しようとしたことも大きな要因となつて回復力に繋がつた。

実家で療養中の私に、一度も会いに来てくれなかつた夫。

治るまでは離婚はしないとメールをしてきた夫。

優しさと表裏の冷たさを持つていた夫に、本当はまだ未練がある。いや未練どころではない。愛してる。まだ、愛している。

だが二年間に及ぶ別居生活をしてしまつては、今更元の関係には戻れない。

祖父母を介護のため実家で引き取ることもあり、近々ひとりて生活するための部屋を借りるつもりだ。

離婚届は、私がもらつてきた。

離婚届を書いている途中でも、まだ上擦るような、別れたくないという思いで泣けて泣けて、涙の滲んだものになつてしまつた。

未練を断つつもりだけの離婚届ではない。

ひとりて生き抜くための決心も含ませての離婚届だ。

少女はまだ私の後ろにいるが、「監視者」のように私を脅かさない。

むしろ、私の良心とでもいふべき存在となつていた。いや、少女が出て来た時から、少女は私の押し潰された良心を担つていたのだろう。自分の不幸だけに溺れて、周囲の

## 第4回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

### 文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

**主旨**●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

**募集内容**●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）

**応募資格**●不問

**応募規定**●400字詰原稿用紙5～10枚（原稿用紙使用の場合は必ずA4原稿用紙を使用のこと）。

ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。

応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。

**応募先**●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL & FAX 03-5706-7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

**賞**●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金3万円

優秀作■賞状・賞メダル・賞金1万円

奨励賞■賞状・賞メダル 入選■賞状・記念品

**選考委員**●三神弘・福岡哲司・水木亮・五十嵐勉

**締切**●2008年4月30日（当日消印有効）

**発表**●予選通過作品発表は2008年7月発売の「文芸思潮」ウェブ24号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終発表・受賞作は2008年9月発売の「文芸思潮」25号（秋号）に発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

**主催**●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。



桐ヶ谷忍

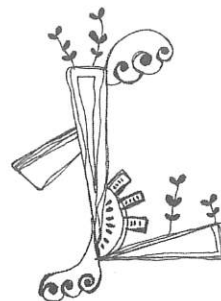
きりがや しのぶ

1975年生まれ

1996江戸川女子短大卒業

会社入社

2003退社/結婚



人々にどれだけ心配をさせたかを全く考えなかった私の無意識が生んだ、少女。彼女は私の代わりに周囲に気遣い、感謝する。そして、私へ視線を送る。その視線に恥じぬよう、私は今日も、ひたすらに生きる。

### 受賞の言葉

### 桐ヶ谷忍

数え上げたところ、現状で私の精神に付けられている病名は七つあります。それでも、パートに出て働けるまでになりました。

回復に向かっているのも事実なのですが、病気と共存する術を身に付けた事も大きな要因となっているようです。

その共存の良い例が、今回の入賞という形で報われた事に、私はある意味この病気に感謝しています。

「少女」はまだ消えることなく、私の背後にいます。その存在感は、実在する隣人より儼く、けれど何を語るでもないので誰より強い視線を私へと送り続けています。

彼女が私へ帰る時を待ちつつ、私はこのやるせない想いを文章で捉えていきたいと思っています。

心配させ続けている夫と義母、そして両親に感謝しつつ。



- 「わたしの好きな縄文人骨」 佐方希与子
- 「長良の笹舟」 後藤 順
- 「少年の頃」 八田智弘
- 「妻の愛を受けて」 鳩 平和
- 「見詰めてくる目」 伊藤伸太郎
- 「病魔」 えび輝
- 「母の母」 澤田和弥
- 「森のない神社は無かった」 栗木一生
- 「工務店の心意気」 西尾 久
- 「大根の眩き」 古川陽一
- 「伴侶への思いやり」 澤文字
- 「セイのこと」 平野ゆき子
- 「海に咲く華」 印南房吉
- 「鷹の蹴落とし」 安田ひとし
- 「エバークリーン」 酒瀬川瞬
- 「公園A」 大星那生
- 「ひまわりたちの運命」 ノイハウス聖子
- 「父の選択」 さくら まい
- 「銭湯に恋して」 西田茂夫
- 「リンデンの葉、散り逝きて」 松尾文雄
- 「秋を待つ」 カオリナイト
- 「美しい人たち」 熊之芸人
- 「バケツの水の思出」 斉藤洋子
- 「息子の彼女」 橋本かず
- 「これは演習ではない……のか」 引津洋
- 「家出」 奥山美千子
- 「国際工業規格ISOに關わった日々」 小佐美智子
- 「母の人生、そして天国へ召された日」 杉野未樹也
- 「何でもありの功罪」 平山浩己
- 「もったいない」 内海 修
- 「母と私」 田中真子
- 「ママシの被害」 山上佳哉
- 「被告を懲役一六年に処する」 野口隆司
- 「母の愛」 桜 りん
- 「仕事に沁みついた」 田島忠一郎
- 「明治の匂い」 杉原不二夫
- 「ベテロ島の蛇」 岩本真理
- 「牛乳瓶の音」 近藤 健
- 「ソメイヨシノの奇跡」 高橋由美子
- 「古巣へ……」 守屋正雄
- 「大学講師」 清水拓雄
- 「死II生」 三村悦子
- 「少女の視線」 桐ヶ谷忍
- 「ジャンパー」 山元杏子
- 「銀行の罪パート①」 西木友世
- 「未来の子供たちと、そして鳩のために」 渡辺昭子
- 「百八十円の想い出」 藤田陽子
- 「一瞬、言葉になりませんでした」 野中のり子
- 「全部、文」 ほり けい
- 「おとつちやま、故郷に帰る」 桜さくら
- 「タレントになれるかも」 葉塚 椎
- 「父の死後知った父のこと、ふたつ」 藤木弓子
- 「新人バスのガイドのツアー」 西守章憲
- 「老け役」は止めよう 南天間
- 「生きている化石が一言」 山口 勝
- 「記憶の底に」 山口順子
- 「ある出会いから」 深山三郎
- 「処断」 河井龍夫
- 「魂の少年」 史桜リュ
- 「近年の広告表現に思うこと」 真田有稀
- 「熱烈歓迎☆ブラックベリー」 内田暢子
- 「じいっと手を見る」 北浦がん
- 「職人」 岡部憲和
- 「過去への夢」 岡部達美
- 「幼児になって」 河上輝久
- 「偶然の所産」 黒沢たか志
- 「花冷えの朝」 上村和子
- 「花水木」 小林理樹
- 「籠の中のネズミ」 公香
- 「ある帰郷」 高橋惟文
- 「光合成のしかた」 いくら凜子
- 「私と読書」 大野美江子
- 「幸せな夫婦」 近野ひろ美
- 「巾着耳の話」 伊瀬知三郎
- 「きみたちは、強い」 田村恰奈
- 「子ども三題」 岩崎 勝
- 「押し入れ」 滝悠玖子
- 「裏切りの女たち」 ヨーコクラーク
- 「ありがとう もう一度ありがとう」 初日の出
- 「子馬を見ながら」 宮本真左美
- 「ありのままの君で」 高塚大史
- 「泣く子供、泣けない子供」 森村康久
- 「プロードバンドの文化人類学的意味」 宮本淳世
- 「フライバシーの空閑考」 南條憲二
- 「青いアトリエ」 田島秀夫
- 「芋堀り小屋の生活」 吉阪市造
- 「心がホームレス」 神明
- 「母の親友」 渡辺裕香子
- 「犬に恋して」 増田由佳
- 「読書のひねくれた意義」 佐藤渚
- 「2007年、能登半島地震の話」 神夏直樹
- 「あなたは女ですか？」 清水祐子
- 「肩書」 永田洋一郎
- 「故郷は異国なり」 長谷川智美
- 「ヨーロッパ再訪に見たそのくにのすがた」 小都里
- 「終の棲家」 前岡光明
- 「忘れえぬ師 縁つて不思議……」 今田淑子
- 「政治家よ驕るなかれ！元日本兵の

- 怒り― 高松真弓
- 「チベットの歌姫」 林 太郎
- 「詩人達の古都」 寺崎浩延
- 「心のとしび、音楽」 川吉知子
- 「年齢を少なく書くと若返る」 上野有治
- 「貧乏アラモード」 山下一味
- 「こどもを叱れますか」 おりふしみのる
- 「オオイスタデ」 関 京子
- 「からだの耳」 柄内まゆみ
- 「オカリナは靴をはいて」 永谷真衣
- 「星座に近く」 天辰芳徳
- 「ある昼下がりに、蒼ざめたバスで」 不破礼智
- 「ばあばの生きた証」 堤かおり
- 「手は、語る」 安井幹雄
- 「携帯神話」 澤村晋作
- 「祖母の留守電」 東風沢かちい
- 「朝の電車で」 栗谷京右子
- 「昼風呂の話」 境 久
- 「手」 伊藤典子
- 「音」 丸山 史
- 「あしたのあたしはどいこへいく」 海童 仁
- 「嘔吐」 安楽健次
- 「幸福の価値観」 関根流海
- 「望郷の海で」 藤原節子
- 「うしろめたい、食べ物」 三村真智子
- 「それは結構『大丈夫』、だと思っ」 ハララ
- 「Re:Re」 日高 伶
- 「木琴家族」 菊川真由美

## 作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします  
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ！

河林満（文学界新人賞）・飯田章（群像新人賞）・八覚正大（新潮新人賞）・大高雅博（群像新人長編小説賞）・小沢美智恵（蓮如賞）・五十嵐勉（群像新人長編小説賞／インターネット文芸新人賞）  
「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい！！

詩	小説
1篇 3枚以内 3000円	1篇 20枚まで 7000円
エッセイ	50枚まで 10000円
1篇 5枚以内 4000円	100枚まで 15000円
10枚以内 5000円	200枚まで 20000円

- ご希望の作家と面談指導も可能です。
- ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などお問い合わせ下さい。

### 作家集団「塊」事務局

〒158-0083  
東京都世田谷区奥沢 7-15-13  
TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848  
asiawave@qk9.so-net.ne.jp